

野添・大浦窯跡群

筑紫郡大野町大字上大利所在古窯跡群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 43 集

1 9 7 0

福岡県教育委員会

野 添 ・ 大 浦 窯 跡 群

筑紫郡大野町大字上大利所在古窯跡群の調査

序

この報告書は、福岡県教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査のうち、重要と思われるものの一つではありますが、わが国古代文化研究の一資料として活用いただければ幸甚であります。

なお、本書の刊行にあたり、現地調査から刊行までご尽力いただいた九州大学文学部考古学研究室の小田富士雄氏及び大浦窯跡発掘調査にあたって、自から調査主体となり、文化財保護にご協力いただいた西日本鉄道株式会社に深く感謝するものであります。

昭和45年3月31日

福岡県教育委員会教育長

吉 久 勝 美

牛 頸 窯 跡 群 地 名 表 (昭和45年3月現在)

遺 跡 名	所 在 地	摘 要
1 足 洗 川 窯 跡	大野町牛頸・足洗川	1基 灰原確認
2 道 の 下 窯 跡	" " ・道の下	5基
3 原 窯 跡	" " ・原	1基
4 ハ ゼ ム シ 窯 跡	" " ・ハゼムシ	1基 灰原
5 上 平 田 窯 跡	" " ・上平田	1基
6 石 坂 窯 跡	" " ・石坂	8基
7 大 谷 窯 跡	" " ・大谷	3基
8 胴 ノ 元 窯 跡	" " ・胴ノ元	1基
9 東 浦 窯 跡	" " ・東浦	4基 うち3基昭和43年西鉄発掘
10	春日町	1基 未確認, 古墳か
11 平 田 窯 跡	大野町牛頸・平田	1基
12 平 田 窯 跡	" " ・平田	1基
13 野 添 窯 跡	" 上大利	10基 うち2基昭和44年県教委発掘
14 大 浦 窯 跡	" "	5基 うち2基昭和43年西鉄発掘
15	" "	1基
16 平 田 窯 跡	" 牛頸・平田	1基
17 向 佐 野 窯 跡	太宰府町向佐野	2基
18 尊 田 窯 跡	" 尊田	1基
19	大野町上大利	1基
20	" "	1基
21 春 日 平 田 窯 跡	春日町大字春日字平田	2基 須恵器・瓦
22 大 牟 田 池 窯 跡	" 春日大牟田池畔	1基

古 墳 地 名 表

遺 跡 名	所 在 地	摘 要
A 入 道 堂 古 墳	大野町牛頸・入道堂	1基
B 中 通 古 墳	" 牛頸・中通	4基
C 胴 ノ 元 古 墳	" " ・胴ノ元	1基
D 畑 ケ 坂 古 墳	" " ・畑ヶ坂	1基
E 惣 利 古 墳	春日町惣利	1基 須恵器ⅢA
F 吉 松 古 墳	太宰府町吉松	1基

例 言

1. 本書は、昭和44年10月に福岡県教育委員会主催、九州大学考古学研究室協力によって緊急調査した野添窯跡群と昭和43年6月～8月に西日本鉄道株式会社主催、福岡県教育委員会協力によって緊急調査した大浦窯跡群の調査報告書である。
2. 本書の執筆者は、次のとおりである。

第 1	小田 富士雄
第 2	小田 富士雄・真 野 和 夫
第 3	柳 田 康 雄
第 4	小田 富士雄・真 野 和 夫
3. 掲載の写真は野添窯跡を小田富士雄、大浦窯跡の航空写真を福岡県警察本部、その他を柳田康雄が撮影したものである。なお、実測図の作成は挿図目次に示すとおりである。
4. 本書の編集は、小田富士雄と柳田康雄が担当した。

本文目次

第1	牛頸窯跡群の発見	1
第2	野添窯跡の調査	4
1.	野添窯跡の立地	4
2.	第6号窯跡	4
3.	第9号窯跡	16
4.	第4号・第5号窯跡	20
第3	大浦窯跡の調査	22
1.	調査の経過	22
2.	窯跡の立地	24
3.	第1号窯跡	24
4.	第2号窯跡	26
第4	総括	39
1.	野添・大浦窯跡の構造と特色	39
2.	須恵器の編年	41
3.	大浦第2号窯生産瓦の問題	44

図 版 目 次

	本文対照頁
P L 1 (1) 野添窯跡の立地遠景……………	4
(2) 野添窯跡の立地近景……………	4
2 (1) 野添第 6 号窯発掘後の全景……………	6
(2) 野添第 6 号窯発掘後における窯内部の状態……………	6
3 (1) 野添第 6 号窯灰原縦断面……………	8
(2) 崖面にあらわれた野添第 6 号窯焚口付近断面……………	6
4 野添第 5 号窯跡発掘後の全景……………	16
5 (1) 野添第 9 号窯発掘中における天井残存状態……………	16
(2) 野添第 9 号窯発掘後における窯壁の保存状態……………	16
6 (1) 野添第 4 号・第 5 号窯跡断面露出状態……………	20
(2) 野添第 5 号窯跡断面……………	20
7 (1) 大浦窯跡立地遠景……………	24
(2) 大浦窯跡垂直写真……………	24
8 (1) 大浦第 1 号窯跡第 1 次床面の状態……………	24
(2) 大浦第 2 号窯跡第 3 次床面の状態……………	26
9 (1) 大浦第 2 号窯跡第 1 次床面全景……………	27
(2) 大浦第 2 号窯跡第 1 次床面遺物出土状態……………	28

挿 図 目 次

第 1 図	昭和38年の野添窯跡地形景観（小田撮影）	1
第 2 図	昭和38年採集の野添窯跡発見須恵器（小田測図）	2
第 3 図	野添窯跡地形実測図（小田・柳田・真野実測、小田製図）	5
第 4 図	野添第 6 号窯跡実測図（小田・真野実測、小田製図）	6～7
第 5 図	野添第 6 号窯内燃烧部の蓋坏出土状態（小田撮影）	7
第 6 図	野添第 6 号窯跡須恵器実測図（1）（真野測図）	10
第 7 図	野添第 6 号窯跡灰原須恵器実測図(2)（同 上）	11
第 8 図	同 上（3）（同 上）	13
第 9 図	同 上（4）（同 上）	14
第 10 図	野添第 9 号窯跡実測図（小田・副島・真野実測、小田製図）	16～17
第 11 図	野添第 9 号窯跡須恵器実測図(1)（真野測図）	18
第 12 図	同 上（2）（同 上）	19
第 13 図	野添第 4・5 号窯跡須恵器実測図（真野実測、小田製図）	20
第 14 図	大浦窯跡地形実測図（西日本鉄道株式会社実測、柳田製図）	23
第 15 図	大浦第 1 号窯跡実測図（柳田・山崎・肥山・桜井測、柳田製図）	24～25
第 16 図	大浦第 1 号窯内出土須恵器拓影（柳田作成）	26
第 17 図	大浦第 2 号窯跡実測図（渡辺・宮小路・柳田測、柳田製図）	26～27
第 18 図	大浦窯跡灰原断面図（柳田・肥山・桜井測、柳田製図）	28～29
第 19 図	大浦第 2 号窯内出土須恵器実測図（柳田実測・製図）	29
第 20 図	大浦第 2 号窯内出土須恵器拓影（柳田・山崎・水城・桜井作成）	30～31
第 21 図	大浦窯跡灰原出土須恵器実測図(1)（柳田実測・製図）	32
第 22 図	同 上（2）（同 上）	33
第 23 図	同 上（3）（同 上）	35
第 24 図	大浦第 2 号窯跡出土瓦拓影（柳田・桜井作成）	36～37
第 25 図	春日平田出土瓦拓影（柳田・桜井作成）	38
第 26 図	春日平田出土須恵器実測図（柳田実測・製図）	38
第 27 図	野添窯跡付近表採の須恵器（真野測図）	42

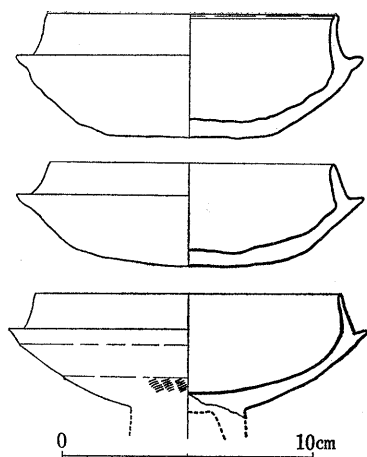
第 28 図	大浦第 2 号窯跡発見の須恵器甕拓影（小田作成）……………	44
第 29 図	大浦第 2 号窯跡瓦拓影（小田作成）……………	44～45
第 30 図	船橋、韓国の平瓦（「船橋」「朝鮮古蹟図譜」三による）……………	45
第 31 図	大分県中津市伊藤田窯跡の平瓦拓影（「中津市史」による）……………	46
第 32 図	福岡県・片縄遺跡採集の平行線文平瓦（小田作成）……………	47
第 33 図	基肄城、垂水廃寺の平瓦拓影（小田作成）……………	48
巻首地図	牛頸窯跡群分布図（小田・柳田作成）	
別添付図	野添・大浦窯跡須恵器編年図（真野作成）	

第 1 牛頸窯跡群の発見

福岡平野の南奥を限る山塊の西側を那珂川、東側を御笠川が貫流して福岡平野の二大河川を形成している。筑紫郡大野町の境域は南半をこの山塊にかけ、北半を御笠川が流れる平野の東南奥にかけた南北に細長い地域である。その範囲は東西約2.5km、南北約10kmに及んでいる、北は粕屋郡と福岡市に、東は筑紫郡太宰府町に、西は筑紫郡那珂川町に、南は筑紫郡筑紫野町に接している。この山塊のなかを北流する牛頸川は大野町の中央部で御笠川に注ぐが、その流域に狭長な平地をつくり出している。旧御笠郡牛頸村はこの山間部に形成された。このあたりはまた律令時代の三笠郡大野郷に属していたと思われる。牛頸村の地域は狭長な低地と山丘が入り組んで錯走した地形をつくり出し、また多くの沼沢を擁している。古代の登り窯を築くには恰好の地形であって、大正時代頃からこの一帯に須恵器を生産した窯跡のあることが知られていた。当時この地域を精力的に踏査されたのは故中山平次郎博士であった。その蒐集資料は今日、九州大学文学部考古学資料室に寄贈されるところとなったが、その多くは8世紀代に比定されるものである。今日この地域に各時代に及ぶ窯跡の存在が知られるようになってみると、地点を明確にできないのが惜しまれる。



第 1 図 昭和 38 年の野添窯跡地形景観



第2図 昭和38年採集の須恵器 (1/3)

その後、この地域の調査はほとんど行なわれないうちに昭和30年代まで及んでいる。昭和30年代も後半になって、この地域が次第に開発の対象として注目をひきはじめてきたが、偶々、筑紫郡春日町在住の鈴木基親氏の蒐集資料中に、の地域で採集された古式須恵器のあることを知ってから踏査を試みたことがあったが、窯跡を確かめるにはいたらなかった。つづいて、昭和38年、上大利のいわゆる小水城築堤の西側山丘の採土がはじまり、崖面に窯跡の断面（のちに野添7号及び8号窯であることがわかった）があらわれ、出土品の若干を板付ベース・キャンプの米田兵衛氏が持ち帰った由通報をうけ、小田が現地踏査を行ない、さらに板付基地に蒐集した J. BOS氏を訪ねて資料をもらいうけて九州大学に帰郷した。この時の資料は古式の須恵器であったところから、また当時九州地方で古式須恵器の窯跡が未見であったところから、関係機関方面に遺跡の保存ないしは調査を行なうべき必要を陳情したのであったが、とりあげてもらえなかった。この時に蒐集した資料が今回調査を行なった野添窯跡群の第6号窯灰原の一部であったのである。しかし、今回の調査までに約10年の年月を経過しており、今回の調査をひきうけて期待していたが、すでに断面にあらわれていた窯跡は湮滅してしまっていた。幸いにも今回調査の資料より同時期の古式の須恵器を出す窯跡が確認されたのでその欠を補うことができた。また農圃の開墾によって設けられた道路断面にも窯跡があらわれ、ここから奈良時代の須恵器資料を蒐集した。これが野添4号及び5号窯であったのである。この後も九州における窯跡に対する関心は行政機関だけでなく、研究者の間でも他遺跡にくらべてひくい状態であり、昭和36年に行なわれた第1回の遺跡台帳作成の際には窯跡はほとんど登録されていない状況であった。つづいて昭和41年度に県教育委員会でこの地域の遺跡分布調査を実施した。主として柳田康雄氏が福岡大学付属大濠高校考古学部生徒の助力をえて実際にあたり、多くの窯跡の分布がはじめて地図上にも明らかにされた。これが現在の牛頸窯跡群の実際を把握する基礎となっている。

昭和43年7月には、住宅団地造成工事によって上大利・大浦窯跡が発見され、工事施行者である西日本鉄道株式会社の主催で発掘調査が行なわれた。調査にはおもに県教委の渡辺正気・柳田康雄両氏があたり、福岡大学・大濠高校の生徒が参加した。つづいて同年12月には同じ住宅造成工事の進展にともなって牛頸・東浦窯跡の調査が同じく西鉄主催、国士舘大学大川清氏担当によって行なわれた。

昭和44年9月、上大利・野添窯跡の調査が県教委によって企画され、小田が依頼された。野

添窯跡のある山丘は以前より採土されていたが、遺跡の破壊にともなって県教委から大野町教委に採土中止を勧告していたが、地元の採土続行の要望は根強いものがあり、発掘をふみ切ったのであった。かくして野添窯跡の発掘調査は昭和44年10月3日から9日までの1週間実施した。調査員の構成は次のとおりである。

九州大学文学部助手	小田 富士雄（調査主任）
福岡県教育委員会文化課技師	西 谷 正
〃	柳 田 康 雄
〃	副 島 邦 弘
九州大学文学部考古学研究室学生	真 野 和 夫
福岡県教育委員会文化課庶務係長	赤 司 岩 雄
〃 主事	中 村 一 世
大野町教育委員会公民館主事補	林 隆 明

牛頸窯跡群は筑紫郡大野町にそのほとんどが擁されており、一部は筑紫郡春日町に及んでいるが、これまでほとんど実態不明であった。今回の調査を含めて計3回の発掘が行なわれているが、その窯跡支群の数からみてもまだ全貌をうかがうにはほど遠い。牛頸窯跡群が筑前地方における最も代表的な窯跡の群集地であるところから、筑前における須恵器編年の研究上不可欠の遺跡であり、また8世紀に下っては大宰府関係遺跡への供給源の有力な候補地であるところから、調査に先立って大濠高校歴史部、筑紫中央高校歴史部などに保管されている牛頸窯跡の採集資料の実査を行ってきた。そこで、今回の調査報告をまとめるにあたっては、柳田康雄氏に大浦窯跡の調査報告を加えていただき、この際に筑前地方における須恵器編年の大要を作成して今後に備えておくことを企図したのである。

調査に際しては小田・真野が終始事にあたり、県教委の三氏が交代で来援され、町教委の林主事補は連日我々や人夫の世話から諸雑事一切にあたられて調査の円滑をはかれた。また筑紫中央高校歴史部生徒が調査の後半に自主参加して援助いただいたことも明記して、関係諸氏に深甚なる謝意を表する次第である。

（小 田 富 士 雄）

第 2 野添窯跡の調査

1. 野添窯跡の立地 (PL1)

野添窯跡は上大利部落の南方 600m 余の山丘東斜面にある。南北に狭長な低地の東西に平行して出入著しい山丘が形成され、平均して海拔 70m の高さを示している。遺跡の北東に築成されている特別史蹟水城は東側山丘の裾にとりつき、さらに本遺跡の地点で、この狭長な低地をさえぎって築堤された小水城へとつながっている。窯跡は道路面からの比高 10m 余の高さにあって、小水城を眼下に望み、東南から吹きあげてくる風はかなり強い。このような高位置をえらんだ占地もうなずかれる。遺跡のあたりは本来東南の水田に迫った山丘であるが、この東南に面した大部分は採土によって削りとられて絶壁をなし、花崗岩の風化によって形成された山肌が露出している。山裾をめぐる西にのぼる新道がつくられて、この道路面の崖や絶壁上方に計 5 基の窯跡断面を数えることができる。昭和 41 年の分布調査を参照して西側から第 4 号・第 5 号・第 6 号・第 9 号・第 10 号と命名した。第 6 号と第 9 号の間には分布調査で 2 基の窯跡(第 7 号・第 8 号)が知られていたが採土によって湮滅してしまった。道路が迂回するあたりにのこっている残丘面に灰原の末端がわずかにみられるが、この湮滅した窯跡に属するものであろう。記憶をたどれば昭和 38 年に採集した須恵器はこの湮滅した窯跡に所属するものであったと思われる。地形測量の結果から、道路際にある残丘と第 6 号窯跡との間はやや谷状に入りこんだ地形を呈していたことがうかがわれる。第 6 号・第 9 号・第 10 号の 3 窯跡は尾根近くに構えられており、出土品からみても低位にある第 4 号・第 5 号の 2 窯跡よりは年代的にさかのぼる。今回の発掘は第 6 号窯と第 9 号窯で実施したが、特に第 9 号窯は危険を伴い、第 10 号窯は全く手をつけることができなかった。

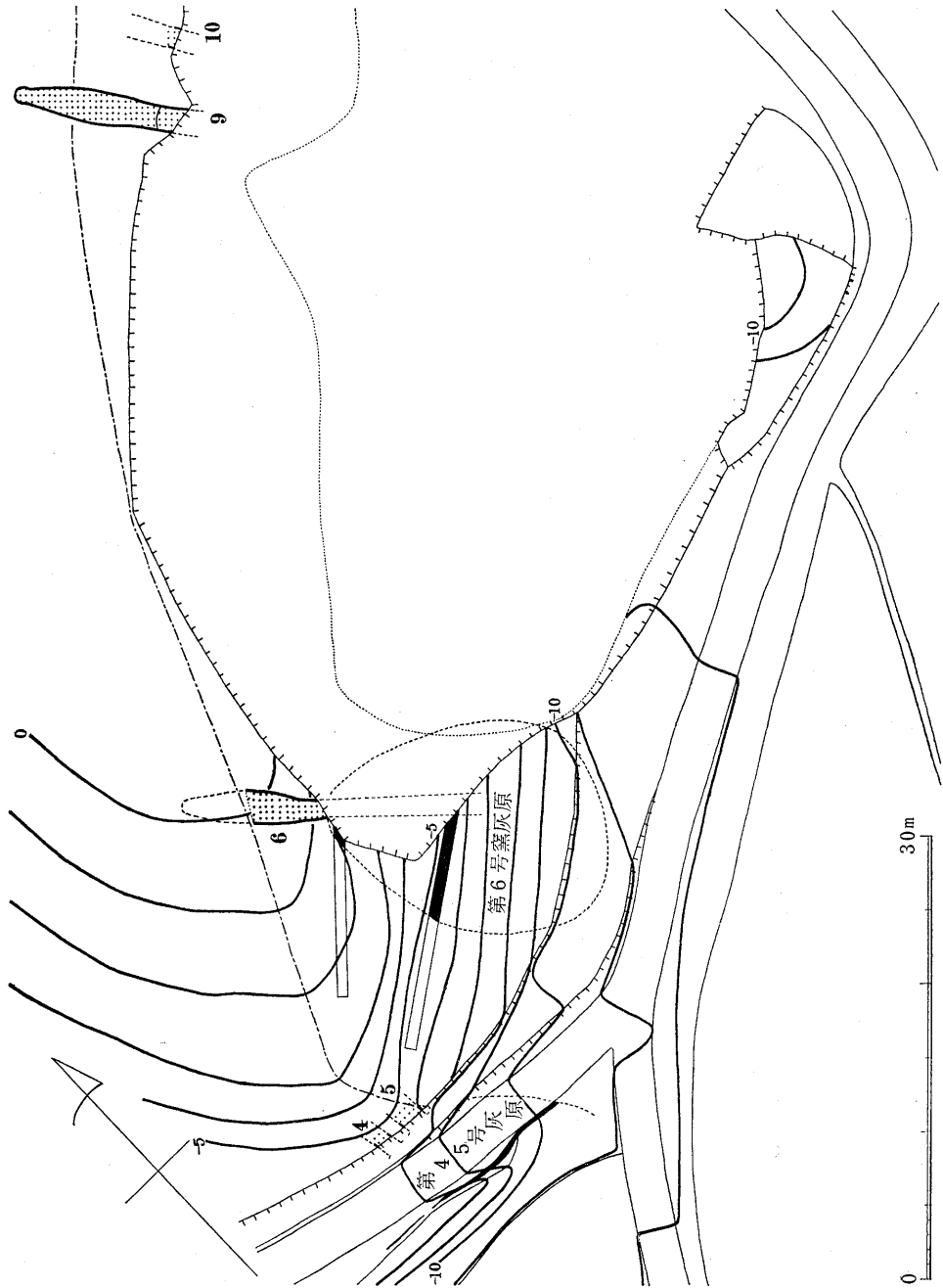
(小田 富士雄)

2. 第 6 号 窯 跡

(1) 立 地

東南に傾斜する斜面で、道路より約 10m の高さのところに焚口を構え、東南～北西方向につくられた窯である。調査前の採土によって焚口部は切断されて横断面が崖面にあらわれている。さらに採土による削り取りは窯跡前方の灰原のほぼ半分を切断する状態となっている。窯跡の発掘は崖面より奥に約 5 m のところですよめたが、ここで土地の境界に達したので中止せざるをえなかった。窯の全長はおそらくこの倍近くに及ぶであろうと思われた。ところが隣接

地は後世に削平されたらしく、西側に傾斜しているので、発掘をつづけても削り去られている可能性が大きい。焚口から前方に広がる灰原は28°の傾斜をなして道路にいたる。



第3図 野添窯跡地形実測図

(2) 窯 の 構 造 (第4図, PL2・3)

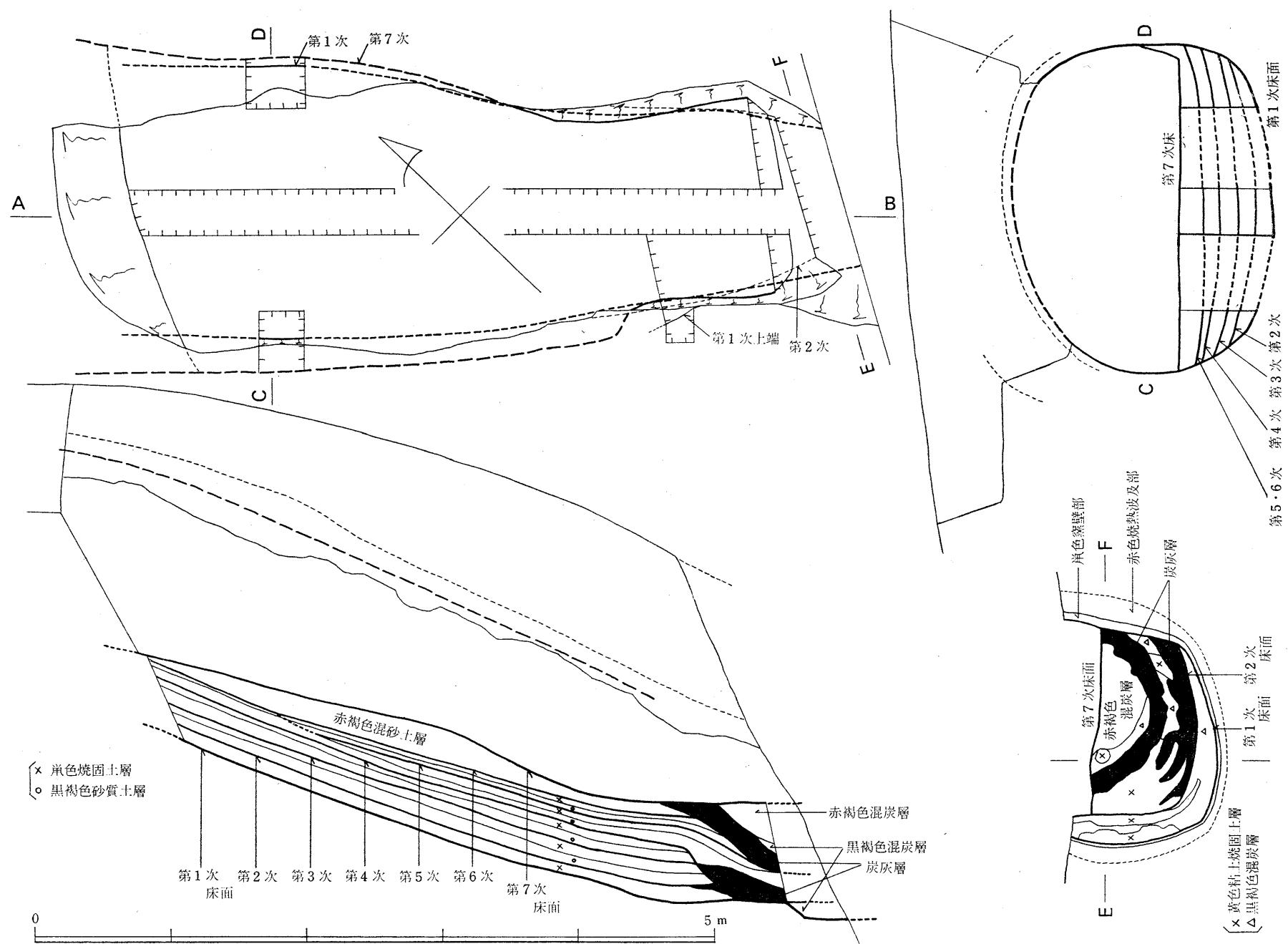
発掘した部分の長さ5mで、焚口は切断されてしまっているが、燃烧部と焼成部の前半に分けられる。最終操業時の窯底は地表から約2mの深さにあり、削りぬき地下式の無段登り窯である。窯の主軸はN44°W、窯底面の傾斜は15°である。

燃烧部 焚口が削除されているので正確な長さはわからないが、崖面で切断されたあたりはほぼ焚口に近い部分であるらしい。これより1.5mほど奥にすすむと窯幅がにわかに広がっているの、これまでを燃烧部とすることができる。燃烧部では床面も平らである。この部分での幅は平均して1.45mである。崖面にあらわれた断面(E~F)の観察では最終床面の下方70cmと85cmの2段にわたって燃きしまった固い面があり、U字形断面をなす。特に2段面の壁面は北側は1段目と共有しているが、南側では20cmほど拡張している。ここでは少なくとも3回にわたる窯の改造が予測できるのである。次第に床上げしていった様子がうかがわれるが、その際に焼け固まった粘土のブロックや炭灰をかきこんで改造したものである。

焼成部 燃烧部につづいて窯幅を広げ、2.3mとなる。燃烧部から26°の傾斜で焼成部と連続し、焼成部の床面は再び緩傾となり15°の傾斜で一様な斜面をなしている。最終操業時の窯内の高さは窯壁が比較的良好に保存されたあたり(断面C~D)で復原して1.2mとなる。

窯改造各時期の調査 以上に記した窯構造の実際は最終操業時における状態である。ところが崖面における観察で3回以上の窯構造の改造が知られたので、さらに窯体各部における解剖を行なって改造の実態調査を行なう必要が生じてきた。したがって主軸線ぞいにトレンチを設け、その結果を参考して燃烧部南壁側と、焼成部の両壁ぞい(断面C~D)を切断してその概要を探る方法をとった。その結果、第1次操業の床面は70cm低く構えられていることが知られた。かくして最終時まで7回の操業床面を検出できた。さらに崖面にあらわれた3回の床面は第1次・第2次・第7次にあてることが確認できたのである。縦断面における観察では第6次までの焼成部床面は同傾斜で床上げされており、20°の傾斜角を示している。また第5次と第6次の床面は断面C~Dの附近で一致する。燃烧部と焼成部の境界には段を設け、燃烧部には炭灰の堆積層がみられる。この境界は第4次までは同位置にあるが、第5次と第6次では床上げする関係上であろうか焚口方向にのびている。最終次(第7次)は上述したように傾斜も異り、境界も窯内にすすんで第6次までとは様子が急変している。

次に横断面における観察では焼成部が燃烧部より幅広くつくられるという原則は最終次まで継承されているが、燃烧部では北側壁は各次を通じて第1次壁を利用して床上げしてゆくが、南側壁では第2次壁をせばめてつくり、第7次までこれを踏襲している。焼成部における断面では両壁はほぼ第1次のそれを踏襲して床上げしてゆく様子を見ることができるとくに第1次床面は皿状断面をなし、窯壁も中ふくらみを呈して全体が見事な楕円形断面を形成してい



第 4 图 野添第 6 号窯跡実測图 (1/40)

る。ところで第7次床面は第1次より数えると70cmも床上げしているの、それに応じて窯内部の高さは低くなる。したがって第7次において復原できた窯天井が第1次以来不動のものであったのか、あるいは床上げに応じて天井も高めていったものであるのかという疑問が生じる。もし、天井を高めたとするならば、少なくとも第7次においては割りぬきでなく、地表面から掘り下げて改めて天井をはりわたした構法も考えられる。このような7次にわたる窯改造があきらかにされたが、それは必ずしも長期にわたる操業を意味しない。生産された須恵器の形式観とあわせみて、短期間における頻繁な生産の結果とするのが妥当な解釈であろう。

(3) 窯内遺物の出土状態 (第5図)

窯内の発掘によってまとまった状態では発見されなかった。焼成部では天井が陥没していたのでこれらの土砂をのぞいてゆく過程で甕・壺・蓋坏などの破片が混合して発見されている。燃焼部では蓋坏の完形品が発見されたが第7次床面よりも浮きあがっていて原位置とも思えない。第1次～第6次の床面探索の解剖調査になると、その過程に含まれていた須恵器破片はきわめて少なく、また破片も小さいものであった。第7次操業時の須恵器と大差ない。



第5図 野添第6号窯内燃焼部の蓋坏出土状態

(4) 灰 原 の 調 査

窯跡焚口の前方には炭灰と共に多くの須恵器が含まれている。下方道路に至る傾斜は 28° である。道路に面した切断面、さらに窯焚口に至る等高線にそったトレンチを2カ所設けて灰原の限界と堆積状況を調査した。それによって推定される灰原の広さは幅 14m、長さ 19m のほぼ楕円形平面をなし、深さ 66cm である。一様に炭灰層をなし、なかに大量の須恵器片が含まれている。この灰原全体に包含されている須恵器の量は大変なもので、これまで我々が経験した灰原出土器の密度としては最大のものである。窯燃焼部幅の延長先にあたる崖面（約10m前方にあたる）灰原層の部分で、幅 1.5m にわたって灰原下底面が皿状に凹んでおり、地表よりの深さ1.15mとなっている。おそらく焚口から窯体主軸を延長してこのような溝状の床をなす工作がなされていたものと思われる。灰原の断面観察では窯内部の調査で7次に及ぶ改造の痕跡が確かめられた事実に対応するような堆積の断続を識別することはできなかった。このことは灰原遺物のおびただしい量とあわせ考えて、短期間における頻繁な操業を考える上に有力な支証となるであろうか。

（小 田 富 士 雄）

(5) 遺 物

坏 身 （第6図 2・4・8・9・11・20～25，第7図 34・35）

細部の形態上の違いから3種に分類される。

（a）蓋受けが高く（1.2～1.7cm）、口唇に古式の特徴をもつもの。最大径も比較的大きいものが多い（13.4～15.6cm）。全体として口唇の特徴はシャープさがうすれてゆく傾向にある。内面の底部には同心円のタタキ痕を有する。

（b）蓋受けは高いが口唇に古式の特徴をもたないもの。立ち上がりの内傾度はaと大差はないが、体部が大きく発達して深いものが多い。内面底部にはaと同じくタタキ痕を有する。その場合、aでもみられたが、上からナデ消す場合とそのまま明瞭に残っている場合とがある。量的には最も多い。

（c）蓋受けは低くなり（0.8cm）、内傾度も著しい。bに比べて最大径（13.2cm）、深さ（4.1cm）ともに減少する。これに相当する坏には、窯内最終操業床面の直上から出土した2個の完形品が含まれる（1）。内面にはタタキ痕はみられない。

坏 蓋 （第6図 1・7・10・14～19，第7図 30～33）

身と同様3種に分類されるが、坏身との組合せにおいては、坏aに対して蓋a、坏bに対して蓋aとb、坏cに対して蓋cが考えられる。

（a）天井部と体部との境に明瞭な段がつけられて口唇には古式の特徴を残すもの。口径は

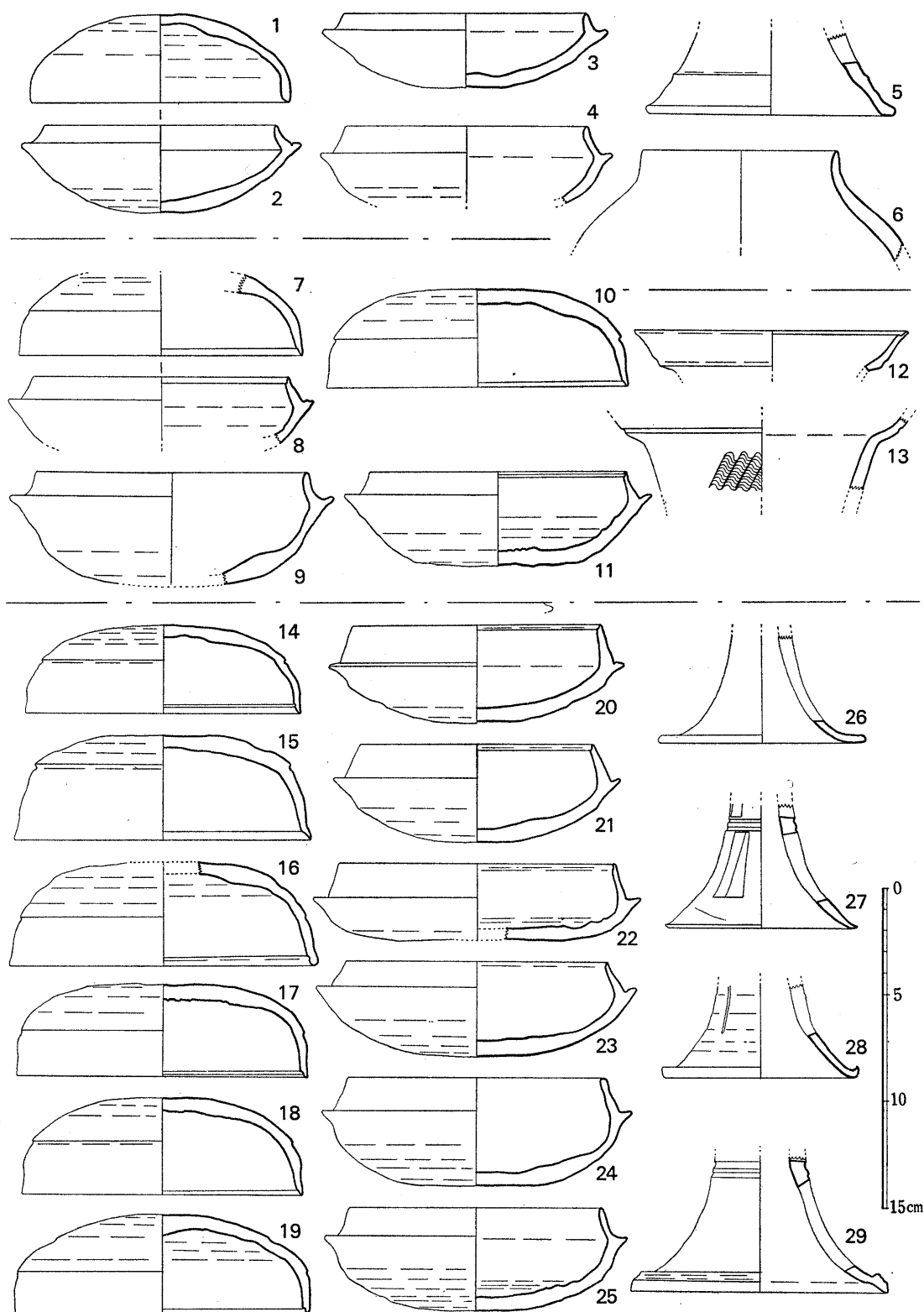
14cm 前後のものが多く、ヘラ削り仕上げは丁寧である。天井部内面にはタタキ痕を有する。
量的には最も多い。

(b)天井部と体部の境の段は沈線で表現されて、天井部から体部へのつながりはなだらかなり、はっきりした区別がなくなる。口唇の特徴は顕著でなくなる。外面にヘラ記号をもつものもある。

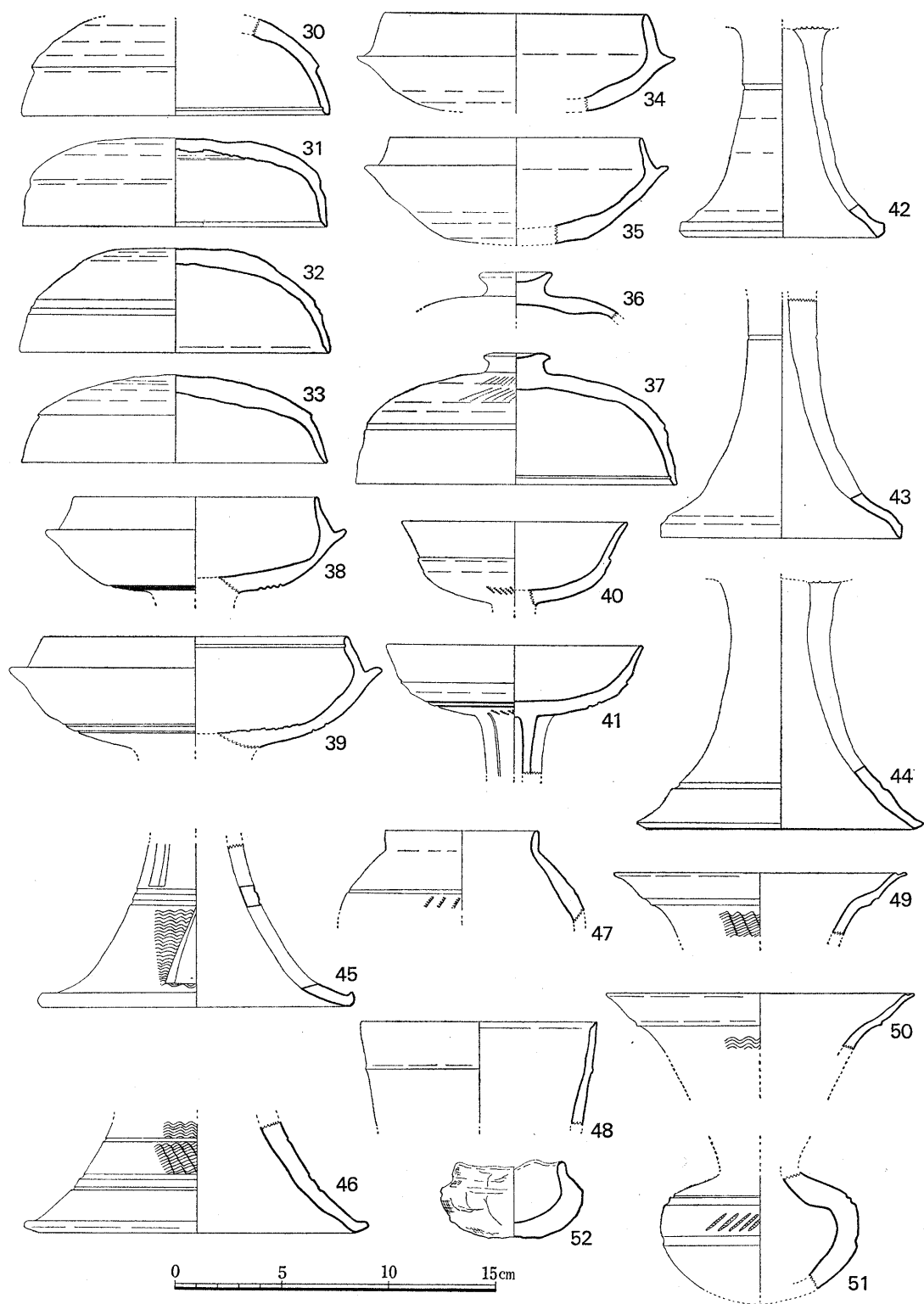
(c)天井部と体部を画する沈線もなくなって全体に扁平な感じとなる。口径12.2cm、高さ4.1cmを測る蓋1は身2とセットで、外面にヘラ記号を有する。

第 6 号 窯 跡 出 土 蓋 坏 計 測 値

窯 内 最 終 床 面 上				灰 原			
蓋		身		蓋		身	
口 径	高 さ	最大径	高 さ	口 径	高 さ	最大径	高 さ
12.2	4.1	13.2	4.1	14.4	4.4	14.4	4.8
		13.8	—	14.4	4.8	13.6	4.6
		13.4	3.5	13.8	4.1	14.0	4.6
				13.8	—	15.2	4.5
窯内第1次床～最終床内				13.2	4.6	14.6	5.1
				14.2	4.1	15.0	4.5
13.2	—	15.0	4.2	14.6	4.8	11.8	4.3
14.2	4.1	14.2	—	13.8	4.6	14.0	—
14.6	—	14.4	—	14.0	3.9	13.8	4.6
15.2	—	15.2	5.2	13.8	4.3	14.6	—
14.1	4.6	14.6	4.4	14.0	4.1	14.0	4.5
13.6	4.4	14.4	—	14.0	4.8	15.6	3.6
13.2	3.8	13.8	—	13.0	4.1	14.4	4.5
13.4	—			14.0	4.6	14.2	4.9
				14.6	—	14.4	4.3
				14.6	—	16.0	—
				14.0	4.6		
				14.2	4.1		



第 6 图 野添第 6 号窯跡須恵器実測图 (1) (1/3)



第 7 図 野添第 6 号窯跡灰原須恵器実測図 (2) (1/3)

有蓋高坏身 (第7図 38・39)

大小二種類出土している。大形のものは、最大径 17.4cm で蓋受けは高く、口唇内側に古式の特徴をもつ。底部内面にはタタキ痕を有する。小形のものは、最大径 14cm を測り口唇は単純なつくりである。いずれも体部下面に 2～4 条の沈線をめぐらす。

高坏蓋 (第7図 36・37)

口径 16.1cm、高さ 6.1cm。つまみの形態は (36) と (37) ではやや相違している。天井部と体部の境は沈線状になる。口唇には内側に細い沈線が入る。天井部外側はカキメ整形したのち櫛状施文による刺突文が二重にめぐらされている。内面にはタタキ痕が部分的に残っている。

高坏 (第7図 40・41)

口径 10.6cm と 12.2cm の二種類がある。大形のものはやや扁平で浅い。体部には段がついて厚みをまし、外面には刺突文や沈線を施す。(41)は長脚の二段透しになると思われるが、上段の透孔は透しにならずに沈線状をなす。

高坏脚 (第6図 5・26・27・28・29) (第7図 42・43・44・45・46)

高坏の脚部は比較的多くの出土をみた。実測図では透孔の幅の不明なものについては断面のみで示した。大きく、小形のものと大形のものに分けられる。小形には (26)・(27)・(28) などがあり、脚端の形態もこれらが代表的である。透孔は 1 段と 2 段に入れる場合があり、形態にも方形・三角形・線状を呈するものなど種々ある。

この傾向は大形のものでも同様である。(45)はなかでもとくに大形で千鳥式に方形と三角形の透孔を上下 2 段に入れ、中央部の 2 条の沈線で画した下段には波状文をめぐらしている。非常に装飾的である。脚端の形態は上端がはねあがるもので (28) と共通する。(46)は脚付壺などになる可能性もあろう。

甕 (第6図 12・13, 第7図 49・59・51)

口径 13.0～14.5cm を測り、口頸部の発達が著しいが、口縁には古い特徴を具えている。頸部には波状文を施す。整形は入念になされている。球形部は一点出土したのみであるが、径は 9.3cm、中央部に刺突文をめぐらしその上下に沈線を配している。

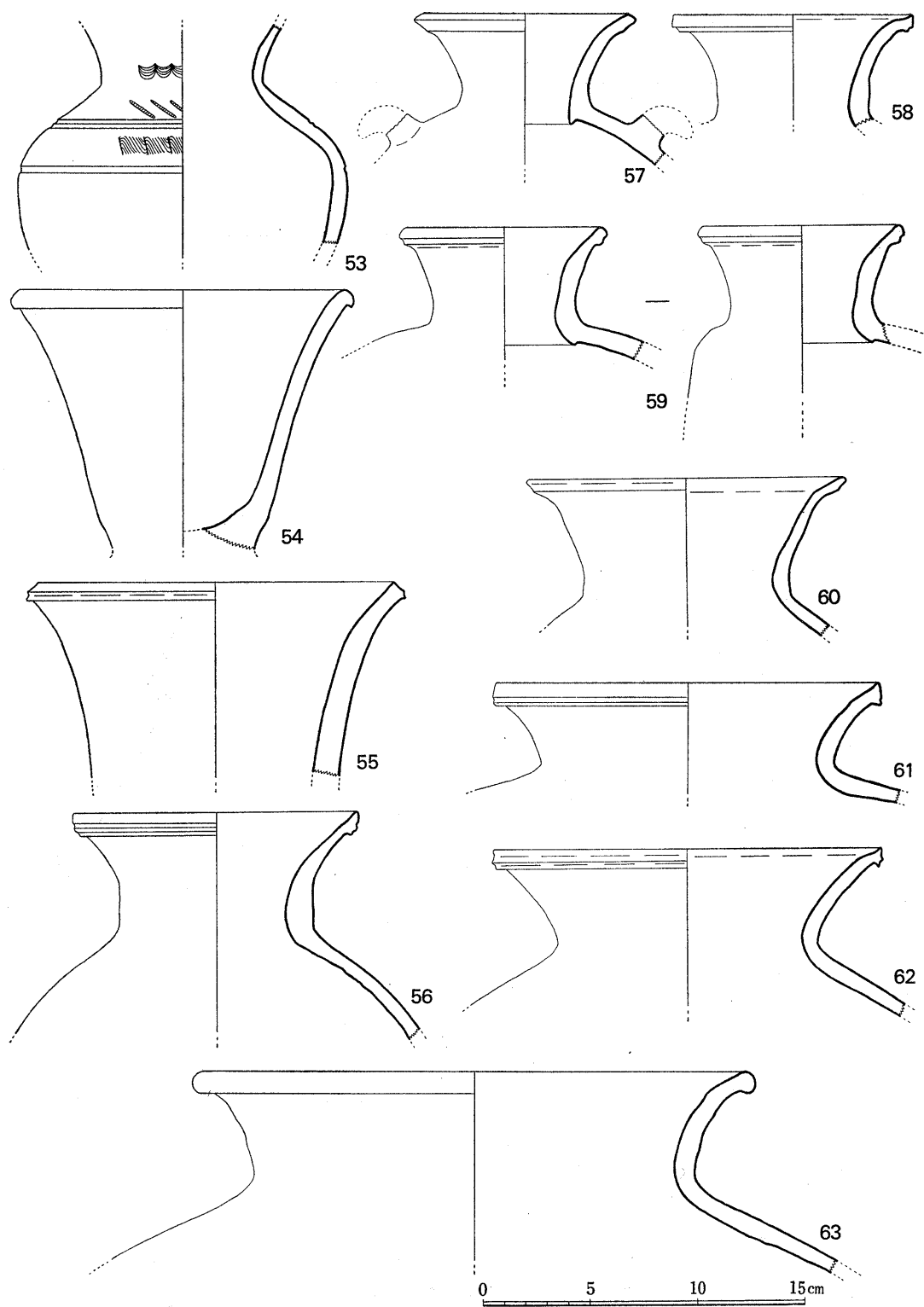
埴 (第6図 6, 第7図 47)

小形(口径 7.2cm)と大形(口径 9.3cm)の 2 種があるが、どちらも直立する短い口頸部をもつもので形態的には類似している。小形のものには胴部に沈線を入れてその下に刺突文を施している。

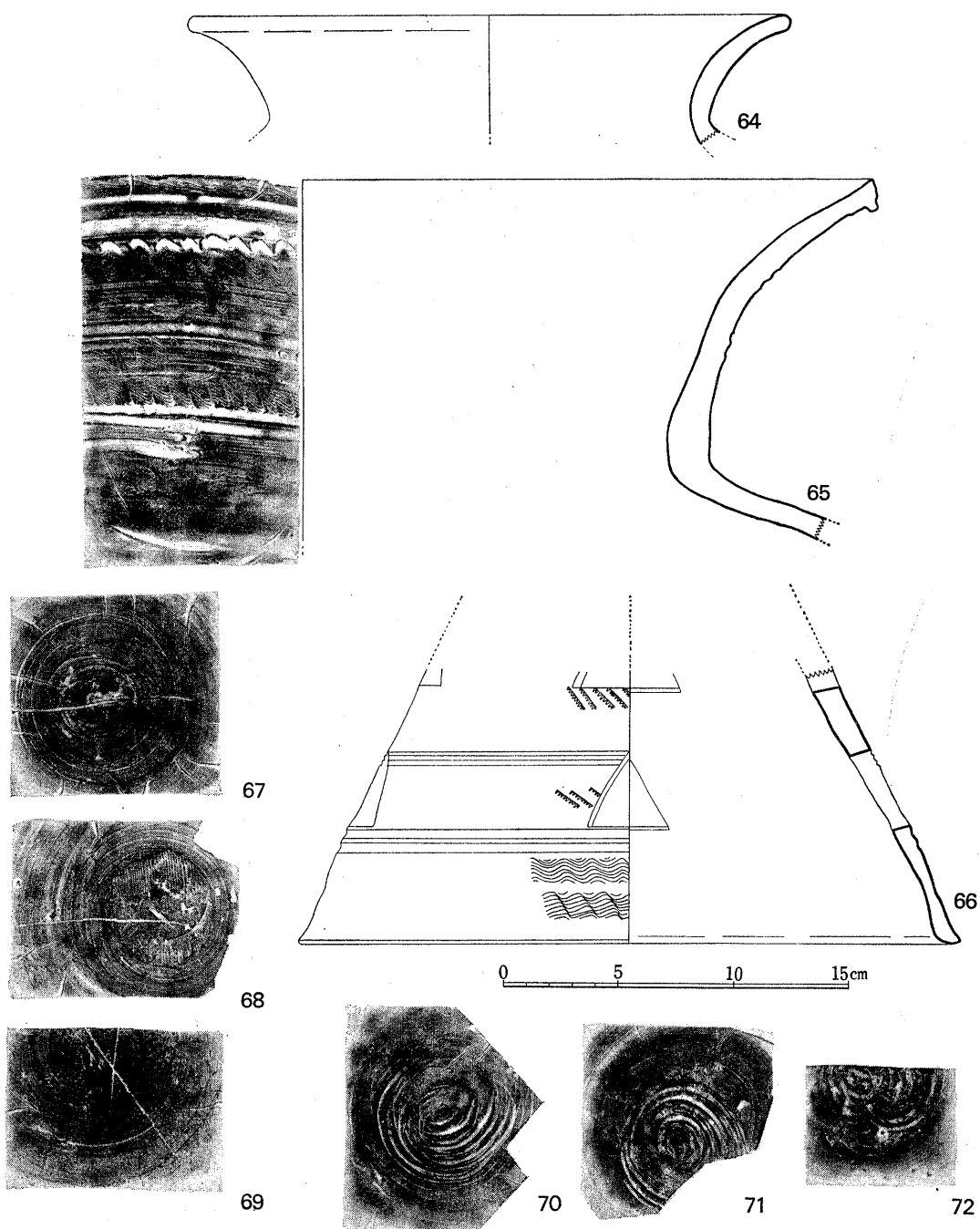
壺 (第8図 53)

口縁部を欠損しているが、通常の壺の形態よりは頸部が細くなって長い。胴部最大径は 15.5cm である。刺突文・波状文を施すなど装飾的要素が多い。

長頸壺 (第7図 48)



第 8 図 野添第 6 号窯跡灰原須恵器実測図(3) (1/3)



第 9 図 野添第 6 号窯跡灰原須恵器実測図 (4) 及び拓影 (1/3)
 (67~69の杯のへら記号、70~72蓋杯内面のタタキ)

口径 11.1cm で直立気味の口頸部である。口唇内側には古い特徴をわずかに残しており、頸部中央には低い凸帯がめぐらされている。

鉢 (第 8 図 54・55)

大小二種類ある。(54)は口径 16cm、(55)は 17.6cm でどちらも底部を欠く。口縁の形態は(53)の場合非常に鈍くなっていて、小形の甕などの口縁部と同様の傾向を示している。体部の器壁は一樣に厚くつくられていてしっかりしている。

横 瓶 (第 8 図 56・60)

口頸部破片で全体の形態は不明であるが、胴部にはタタキの上から口頸部に対して縦にカキメ整形が加えられている。このことは成形の過程において口頸部と軸を異にする作業が最初に行なわれたことを示しており、おそらく横瓶であろうと思われる。口径 13.3~15cm を測る。

提 瓶 (第 8 図 57・58・59)

口縁部は凸帯を有し形態的に若干の違いがみられる。体部には短い耳を有している。体部側面の扁平性はすでにはっきりと現われている。(59)はやや大形のもので体部の成形にはタタキが使用されている。

甕 (第 8 図 61・62・63, 第 9 図 64・65)

口径約 18~26cm の小形のもの、口径 49~57cm の大形のものがある。小形の甕には口縁にしっかりした凸帯を有するもの(61・62)と丸くおさめて簡略化したもの(63・64)とがある。量的には両者ほとんど変わらない。内外面ともタタキを有する大形の甕は口頸部が大きく発達していて、中央部 2 カ所にめぐらした沈線によって 3 区に分ち上の 2 段に波状文を施す。波状文は比較的整美である。

大形器台 (第 9 図 66)

脚の一部である。脚端口径 29cm を測り、脚裾が直線である形態からみて、いわゆる高坏形のものでなく受皿部・円柱部・脚部をもつ百済系統の器台と考えられる。透孔には上下に 4 対の三角形透しが入り、そのほか波状文・刺突文によって装飾されている。

小 壺 (第 7 図 52)

口径 5.3cm の手づくねの土器である。焼成は須恵器質で灰色・堅緻である。

(真 野 和 夫)

〔補 記〕 第 6 図のうち 1~6 は窯内第 7 次床上資料

7~13 は窯内第 1 次~第 7 次床上資料

14~29 は灰原資料である。

3. 第 9 号 窯 跡

(1) 立 地

第 6 号窯跡の北方46mをへだてて位置する。第 6 号窯から連続する崖面に横断面が露出していて、ほぼ同方位をとっている。灌木が茂っているので厳密にレベル差を測定できなかったがほぼ同レベルか 1 m程度高位置にあると思われる。灰原は完全に削りとられてしまっている。崖面にみえる窯跡の横断面には炭灰の堆積がみられるので焚口附近が露呈していると推測されたが、崖面近くの窯壁・床面には亀裂を生じていて発掘作業はかなりの危険をともなった。

(2) 窯 の 構 造 (第 10 図, PL 4・5)

煙出しまで完全に発掘することができた点で、野添窯跡中の唯一の貴重な例である。焚口よりの全長10mである。窯体の主軸はN 38°W の方位をとり、焚口から崖面まで 1 m余の前庭部がのこされている。

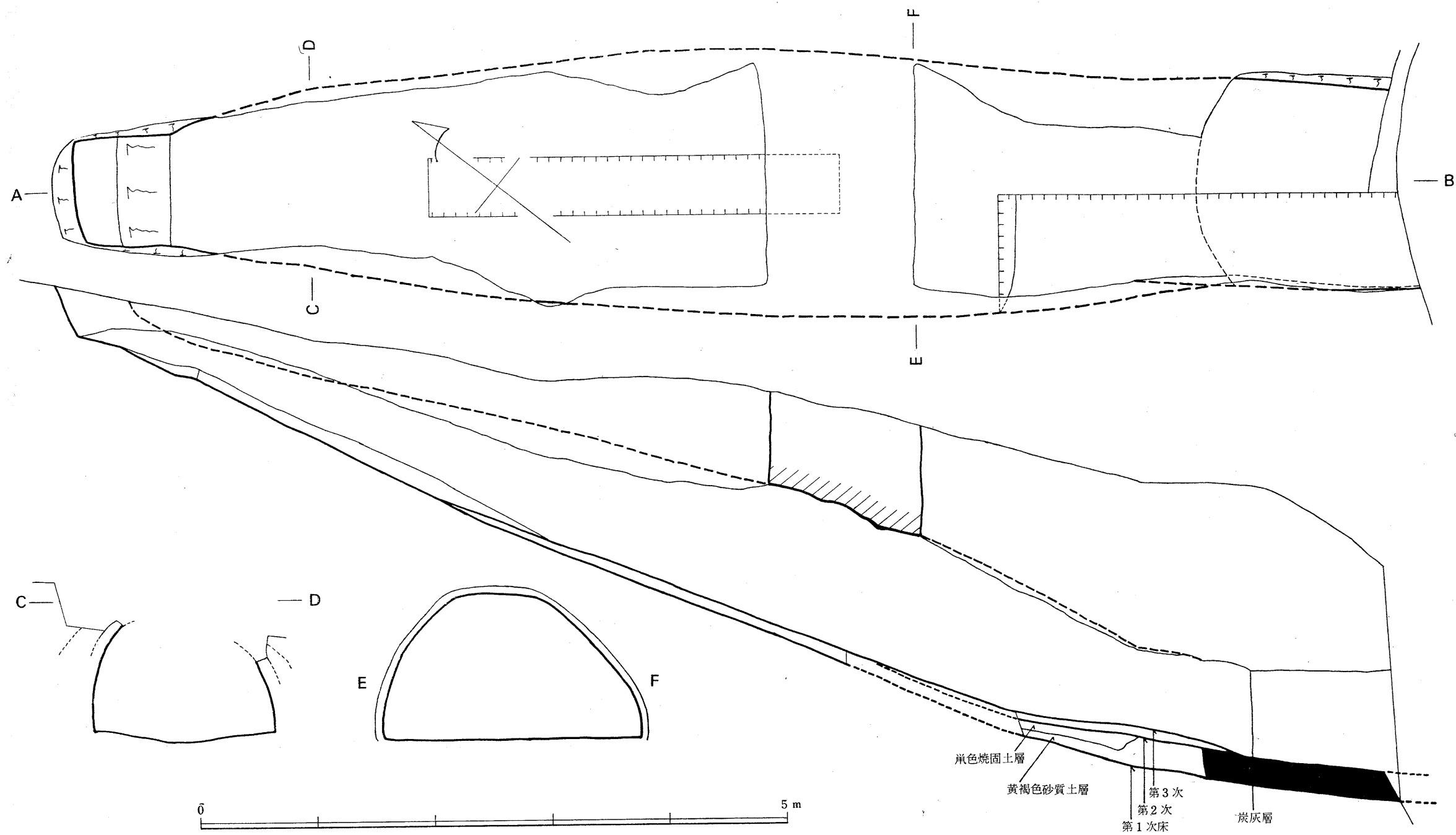
焚口部 幅 1.8m で床面は緩傾斜面をなす。天井の位置を復原できたが、その縁辺は上面からみると弓状を呈し、左右壁は直立している。よく焼き固まっていた発掘に際しても壁面の検出は容易であった。天井までの高さは最高部で 70cm、両側壁にむかってひくくなる。前庭部からつづく炭灰層は焚口の床面より下にもぐるので、2 回以上の窯改造にともなう床上げが予測できた。

燃焼部 焚口から窯内のどのあたりまでを燃焼部として考えるか識別がむずかしい。窯体幅は焚口から奥に徐々に広がる形態を示し、床面は平らでなく緩傾斜をなしている。焚口より 1.5m奥にすすむと床面傾斜が変化するので、これまでを燃焼部にあててよいであろう。このあたりでは窯体の幅は 2 mをこえるようになる。

焼成部 燃焼部より床面傾斜が急になり、22°を測る。窯体幅は焚口より 4.5m のあたりで最も広く 2.2mとなり、煙出しにむかって再び徐々にせまくなってゆく。焚口から 2.3mのところから奥行き 1.3mばかりの間、削りぬき天井がよく保存されていて高さ 1.2mのほぼ半円形横断面 (E~F) を呈している。煙出し近くでは窯体幅 90cm、推定復原高 35cm ほどとなる。

煙出し部 焼成部から一段高くなって幅 90cm の隅角プランの煙出しを構成している。焼成部との高差 25cm を測るが、天井の構造は全壊しているので不明である。

前庭部 焚口の前方崖面まで 1.5mばかりの間、焚口の左右壁が幅 1.85m で平行にのびている。窯内の床面や壁面が鼠色に還元焰焼成色を呈しているのに対して赤く酸化焰色を呈している。この部分は床面全体に炭灰が堆積して厚さ 25cm に及んでいる。その下に第 1 次操業時の



第 10 図 野 添 第 9 号 窯 跡 実 測 図 (1/40)

床面があらわれた。床面はほぼ平面に近いきわめてゆるやかな傾斜をなしている。

窯改造各時期の調査 前庭部から焚口における所見によって崖面から燃焼部までの西半分と、焼成部主軸ぞいにトレンチを設定して窯改造に関する調査を行なった。その結果、窯体幅にはほとんど変化なく、床面において3次にわたる床上げが認められた。すなわち、ほぼ第1次の状態が踏襲されているが、燃焼部では第2次に25cm、第3次にはその上にさらに10cmの床上げを行っており、焚口から6.5mばかり奥にすすんだ焼成部のあたりで第1次と第3次の床面が一致し、焚口から2.7mほどすすんだあたりでは第2次と第3次の床面が一致する。この3次にわたる窯の床上げは須恵器の一形式以内の短期内におこなわれたものである。

(3) 窯内遺物の出土状態

窯内部の発掘にあたっては焼成部、燃焼部、焚口附近から須恵器の破片が土砂中に発見されたが、床面にまとまった状態ではみられなかった。

(小田富士雄)

(4) 遺物

杯身 (第11図 8～13)

(a) 蓋受けの高いもの (10・12・13) で、体部も大きくて深い。最大径は14～16cmである。体部の底にはタタキ痕を有するものもある。野添6号窯地の場合の杯bに相当する。

(b) aに比べて蓋受けが内傾し低くなる。体部の扁平なものもあらわれてくる(9・11)。最大径はaとほとんど変わらないが全体的にやや小形になる。6号窯跡のcに相当する。

杯蓋 (第11図 1～7)

(a) 天井部と体部との境を画する段が沈線で表現されて、口唇内側には古式の特徴が残っているものとまったく単純なつくりのものがある。口径13.5～14.5cmである。天井部内面にタタキ痕をもつものもある。

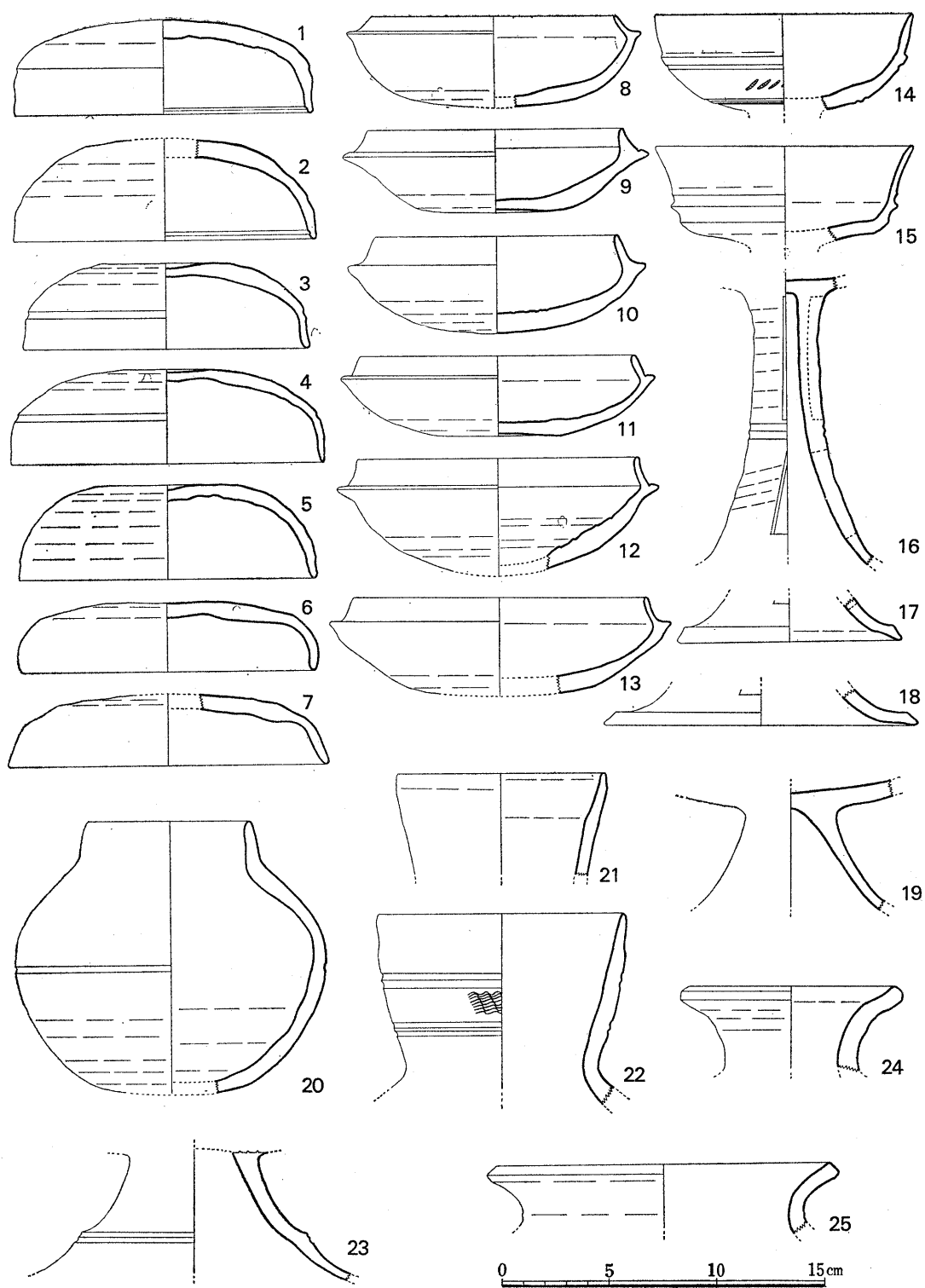
(b) 天井部と体部を区画する沈線も消略されて浅い扁平な蓋となる。口径は14～15cmである。

高杯身 (第11図 14・15)

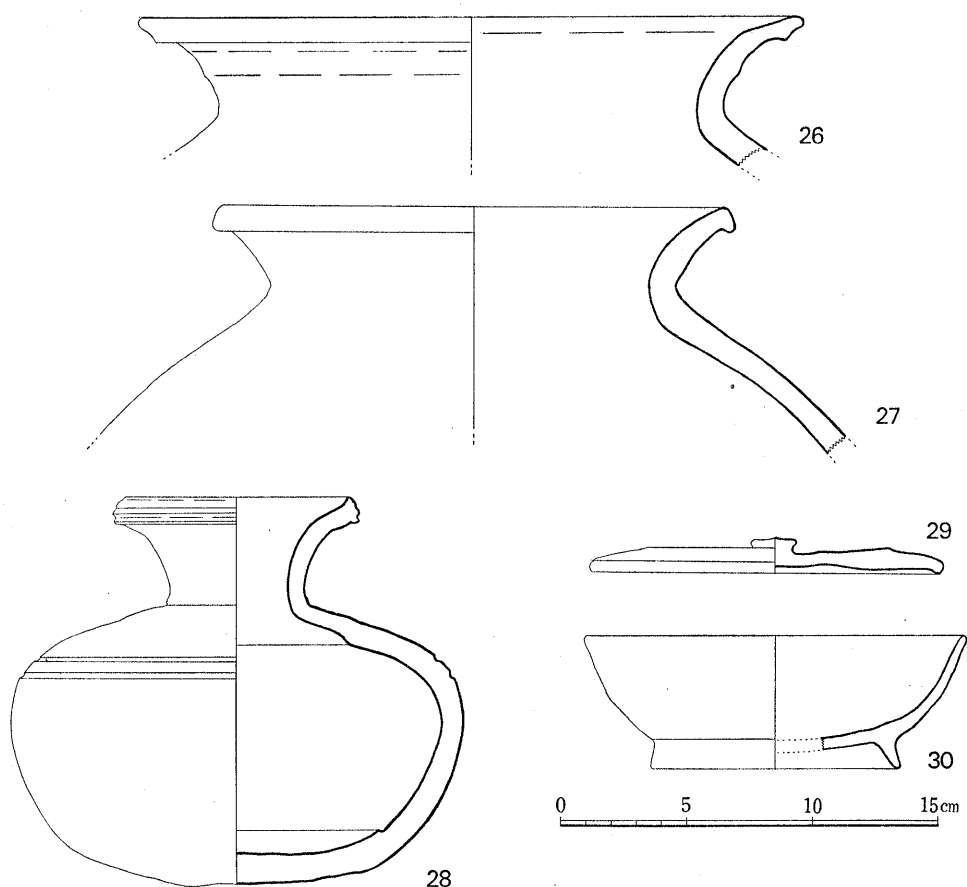
口径12cm前後で杯部の深さは約4cmである。体部には凸帯がめぐり、刺突文が施されることもある。

高杯脚 (第11図 16～19)

(a) (14)などの形態の杯部をともなうものとみられる。上下二段に透しが入れられるが、上段のものは透しにはなっていない。ロクロ成形の際のしぼりの痕跡が著しい。



第11図 野添第9号窯跡須恵器実測図(1) (1/3)



第12図 野添第9号窯跡須恵器実測図(2) (1/3)

(b) (19)は短脚系のものと思われるが、全体の器形は不明である。透孔は有しない。

罎 (第11図 20)

口径7.8cm、高さ12.8cmである。短い直立する口頸部をもつ。胸部には一条の沈線がめぐり。下半はへら削りのあとが著しい。

長頸壺 (第11図 21~23)

口頸部のみの破片であるが大小2種類ある。大形のもののは口径11.5cmで頸部に沈線・波状文がめぐっている。(23)は長頸壺の脚部と思われる。透孔は有しないが、途中で小さな段をつくって径を拡大している。

提瓶 (第11図 24)

口径約10cmを測る。口縁部の凸帯は失なわれて全体に鈍くなっている。

甕 (第11図 25, 第12図 26・27)

大形のもののは出土してなく小形と中形のものがある。小形のもののは口径15.6cmで頸部が非

常に短く、強く外彎している。口縁部は提瓶の場合と同じく凸帯はほとんど消略されている。中形のもは口径 20.5~26.5cm で口縁部の凸帯は丸みをおびて鈍い。

椀 (第12図 30)

窯内への後世の流れ込みである。口径 15.3cm、高さ 5.3cm。体部はなだらかな曲線を描いて底部に至る。器壁の厚みはほぼ一定している。高台は比較的高くて丸みをもっている。

椀 蓋 (第12図 29)

口径 14.2cm で擬宝珠形のつまみを有する。口縁部はほとんど退化した短い L 字形の突出部が下降している。(30)と同様流れ込みと思われる。

細頸壺 (第12図 28)

これは 9 号窯跡周辺での表採品である。口径 9.2cm、高さ 15.5cm である。体部の肩附近に 2 条の沈線をもつ。口縁部には甕などに比べて装飾的な凸帯がつくられている。

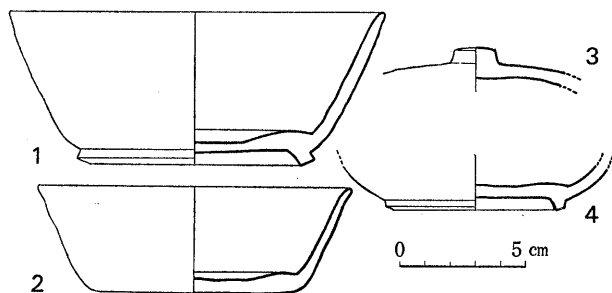
(真 野 和 夫)

4. 第4号・第5号窯跡 (PL 6)

第6号窯跡灰原の末端附近より道路を西に十数米ばかりさかのぼったところ、北側崖面に 2 基の窯跡断面が露出している。地表から窯底までの高さ 1.6m ほどで、両窯の間隔は 1m である。西側のものを第4号窯、東側のものを第5号窯とする。

第4号窯跡は幅 1m で窯壁はよく焼固まってほぼ垂直に近い立上りをみせ、天井はない。崖面に対してやや西寄りに近い方位をといているらしく、断面はやや斜めに切られた状態を示している。窯内土砂の中途に高台付碗形須恵器の完形品 1 個がのぞいていた。8 世紀代の形式(第 VII 式)を示している。窯底より 1m ほどの高さのところに同形式の特徴をもった須恵器破片の層がうすくおおうている。おそらく焚口から前庭部のあたりがのぞいているのであろうと思われる。

第5号窯跡は 1.8m 幅で、底部に厚さ 15cm の炭灰層が堆積している。この窯幅の内側に炭灰



第13図 野添第4・5号窯跡須恵器実測図 (1/3)
(1—第4号窯, 2~4—第5号窯)

層を切って第2次の窯壁がつくられており、壁の厚さ 20cm で外開きを呈する。第2次窯の幅は床面で 80cm を測る。おそらく焚口前の前庭部あたりを切断しているものと思われる。

以上 2 窯跡は幸い採土予定地域をはずれているので保存できるこ

ととなり、発掘の要はなくなった。道路をへだてて南側残丘の断面にこの両窯のものと思われる灰原層が露出している。窯底より2～3 m低く、灰原層もうすい。包含された須恵器の量は少ないが、窯跡断面から採集したものと同形式を示している。 (小 田 富 士 雄)

第 3 大 浦 窯 跡 の 調 査

1. 調 査 の 経 過

大浦窯跡の発掘調査の端緒となったのは西日本鉄道株式会社の「南ヶ丘」宅地造成による。窯跡は昭和41年度の県主催の遺跡分布調査で柳田が発見し、須恵器の中に古瓦を含むものとして注目された。昭和43年5月に宅地造成は着工されていたが、県教育委員会が関知したのは6月にはいつてからであった。県教育委員会はただちに西日本鉄道株式会社と交渉をもった。すでに窯の大半は今回の造成で削平されているので、残った部分の発掘調査を西日本鉄道株式会社の主催で実施することになり、県教育委員会に調査員の派遣申請があった。発掘調査は昭和43年6月17日から8月9日まで断続的に実施された。調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会社会教育課文化財係長	渡 辺 正 気 (調査主任)
東京大学理学部助教授	渡 辺 直 経
福岡県教育委員会社会教育課文化財係技師	松 岡 史
〃	宮小路 賀 宏
〃	柳 田 康 雄

なお、発掘にあたっては福岡大学歴史研究会の山崎茂孝、肥山正秀、桜井康治の三君と福岡大学付属大濠高校歴史部、筑紫中央高校歴史部の生徒諸君の協力も得た。

6月17日 西鉄開発部計画係長荻覚氏及び団地建設事務所長高井良直氏の立合のもとに現地を見学し、調査の打合せを行なう。

6月18日 窯跡のある地域はすでに大半削平されており、灰原付近は造成により土砂が厚く覆っている。ブルドーザによって土砂の排除を行なう。排除後窯の所在確認を行なったところ大半を削平された窯跡2基を発見した。北側を1号とし、南側を2号窯とした。

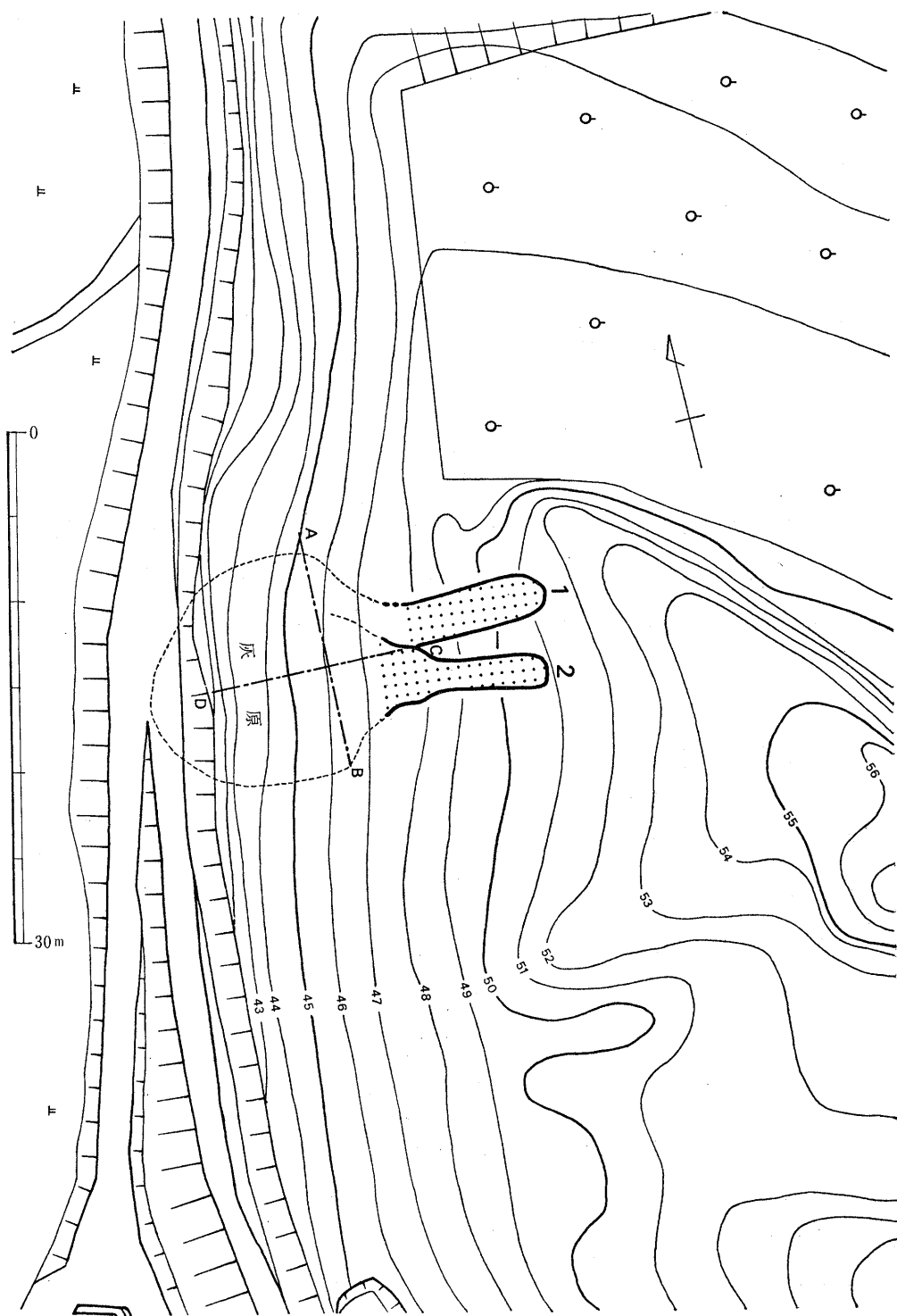
6月25日 1号窯の断面図を作成する。窯内は須恵器大甕片が多く、他の器形をほとんど含まない。

7月7日 灰原の東西断面を見ると表土下の黒色灰層に多くの須恵器、瓦片を含み、その下に2、3層おいてもう1層黒色灰層があるが、これは、須恵器のみで瓦を含まない。

7月16日 灰原の全面調査にかかる。

7月22日 灰原の東西断面図作成にかかり、23日に終わる。

7月24日 1号窯縦断面図完成。2号窯の最上層面の写真撮影を行なう。2号窯最上層（第3次床面）には瓦を含まず、須恵器のみである。



第 14 图 大浦窯跡地形実測図 (1/400)

8月8日 1号窯南半を清掃し、写真撮影を行なう。2号窯南半を最下層床面（第1次床面）まで掘下げ、窯の縦断面図を作成する。2号窯最下層床面には瓦片が多く、燃焼部最下層の瓦は強く熱を受け剥落した破片となっている。

8月9日 1・2号窯とも最下層床面の写真撮影を行ない、実測図を作成して調査を終了した。
(柳田 康雄)

2. 大浦窯跡の立地 (PL 7)

大浦窯跡群は福岡県筑紫郡大野町大字上大利字大浦にある。筑紫郡は御笠川、那珂川が形成する福岡平野の南半を占め、その中で大野町は筑紫郡を二分するかっこうで東西に長く伸びている。大野町の西南部は背振山系の牛頸山からわかれた標高40~150mの丘陵が広がっているが、窯跡は大野町大字牛頸を中心に一部春日町、太宰府町まで分布している。この低丘陵間には狭長な谷が入りこんでおりこの谷に添って窯跡は分布する様相を示す。

大浦窯跡は狭長な谷の入口近くにあって西に水田をひかえ水田面との比高10m余の花崗岩ばいらん土で形成された丘陵の西斜面にいとなまれている。昭和42年8月には道路面に出ている灰原を確認し、古瓦を採集した時には窯跡1基と思っていた。西日本鉄道の宅地造成工事により削平された時にはほぼ東西方向に隣接し2基発見されたので北側を1号、南側を2号窯とした。

3. 大浦第1号窯跡

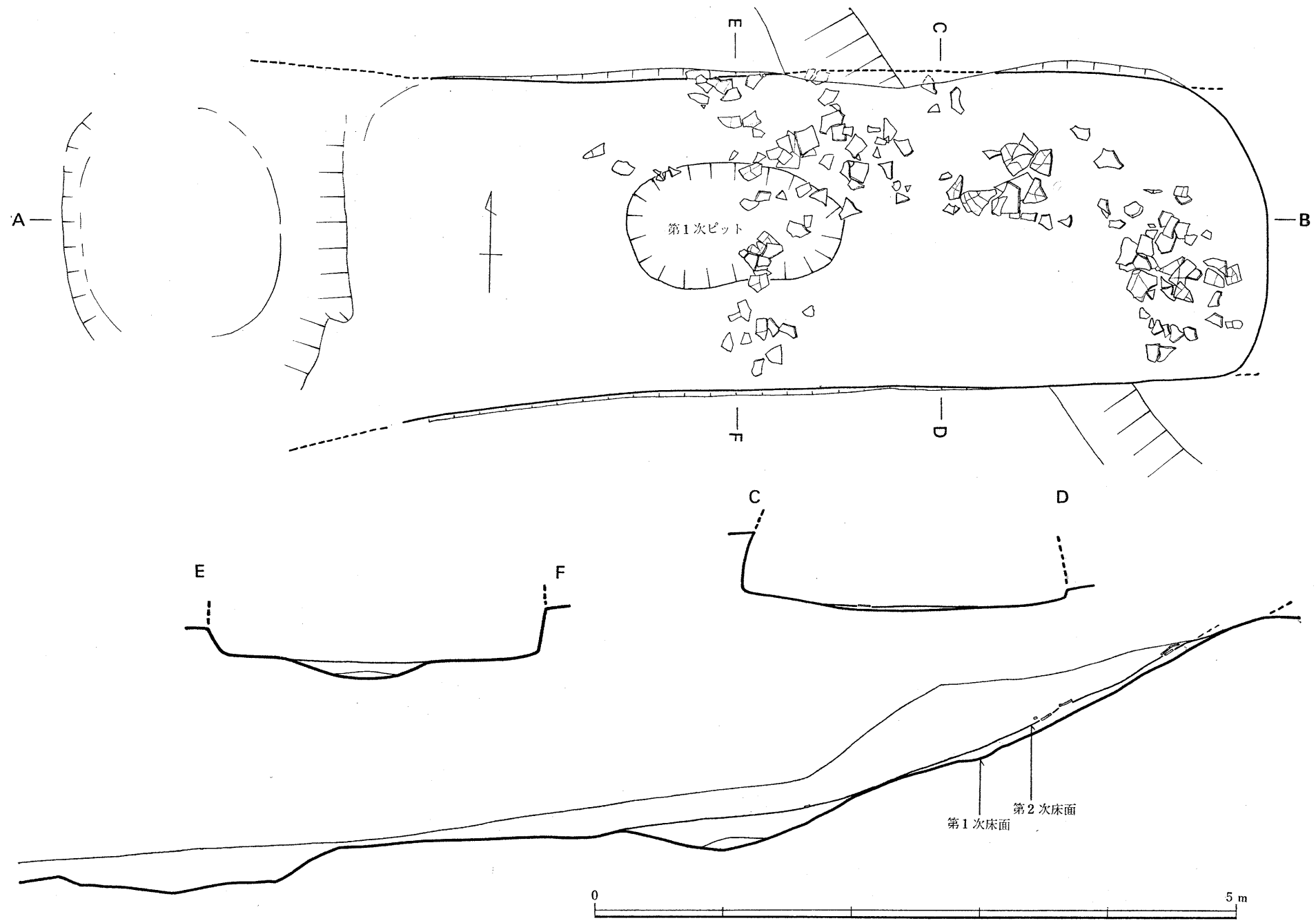
(1) 立 地

水田に面する西斜面で、水田面との比高約8mの高さのところ（標高約48m）に焚口を構え、東一西の方向に構築された窯である。宅地造成工事で上部は大部分削平され、床面の約半分をかるうじて残していた。

(2) 窯 の 構 造 (PL 8、第15図)

窯の残存していたのは7.8mで焼成部の半分から上は消滅し、残存部分もかるうじて床面を残すのみである。窯の中軸線はN78°Eである。窯体は花崗岩ばいらん土に掘りこまれたものであるが、地下式、半地下式の別は判明しない。

前庭部 焚口付近は床面を残すのみで、壁を失っているため壁からは燃焼部と前庭部の別はわかりにくい。凹みの東側の縁までが床面が焼けているので、凹みの東縁が前庭部と燃焼部の境といえるようだ。前庭部の凹みはほぼ楕円形で窯主軸方向径2.2m、これと直角に約



第 15 図 大 浦 第 1 号 窯 跡 実 測 図 (1/40)

2.4m、深さ0.2mの底部が舟底状をしたものである。燃焼部からこの凹みには灰原に続く黒色灰が充満しているが、とくに凹みには炭化物が多く須恵器片をほとんど含まない。

焚口・燃焼部 焚口付近は削平され壁をほとんど失なっているが、燃焼部あたりから床面とほぼ垂直に壁が築かれている。焚口付近の壁は花崗岩ばいらん土を掘り抜いたままの壁で床面、両壁とも赤色にやけている。焚口の幅は2.7mある。

焚口の燃焼部の壁は青灰色に焼締っているが、壁直接にはスサ入り等の塗り壁の痕跡は認められない。埋土の中にはスサ入り粘土の壁の崩壊したものが含まれているが、これは焼成部のものであろう。

焼成部との傾斜変換部に舟底状の楕円形の凹みがあるが最終的にはこの凹みは埋められており、埋められた上面は焼成部の床面となったらしく、青灰色に焼締まっている。凹みは窯主軸方向に1.7m、直角に1mのもので第1次床面の時から存在していたと思われるが強く熱を受けておらず、底面は暗褐色をして褐色の砂質土、青色灰が詰まっている。前庭部凹みと燃焼部凹みの間は2.2mある。床面には炭化物が多く、これは前庭部に続いている。

焼成部 燃焼部凹み東端から水平距離3.2mを残し、これから上部の焼成部、煙道を消失している。床面は幅2.5mで残存部ではほとんど変っていない。床上げによる床幅の差も認められず、床面の改造は行なわれているが、傾斜は26°~28°と大差ない。

壁面は第1次床面のときからのものであるかどうか不明だが、第2次には明らかにスサ入り粘土による塗り壁が施こされている。壁面、床面ともに青灰色に焼締っている。

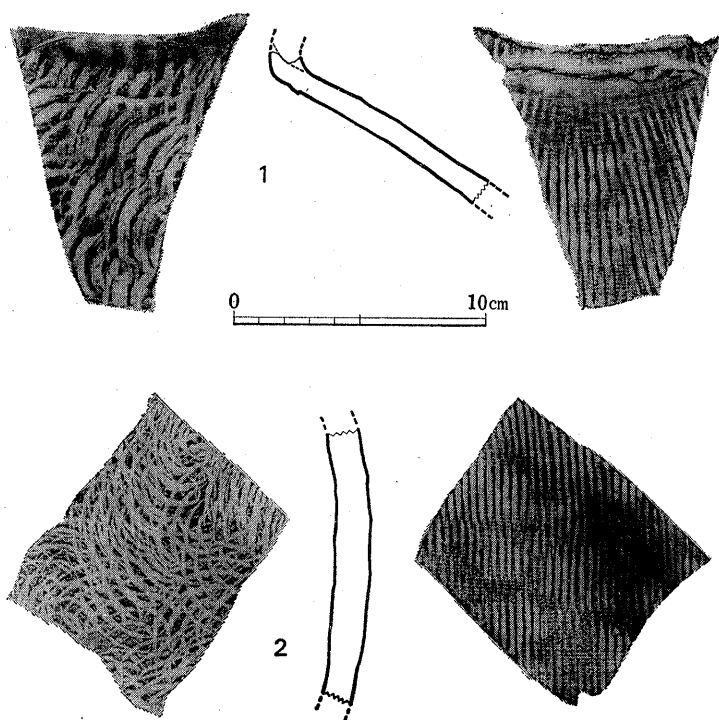
遺物は第1次床面にはほとんど認められないが、第2次床面には大甕片が多量に発見された。

(3) 窯内の遺物 (第16図)

1号窯内は前記のとおり第1次床面には遺物がなく、第2次床面には大甕片が多量に発見された。第2次床面には蓋うけをもつ杯の小片が発見されたが、これはⅣ期の後半に属するものようである。灰原の下層はⅢ期のものからⅣ期の古いものが大半をしめるので、第1次床面の操業はⅢ期の時期に始まったものと思われる。

第16図(1)は大甕の肩部で口頸を欠いている。これによると頸部と胴部の接合の状態がよくわかる。頸部がはずれた部分には叩目が残っているので胴の器壁に内外から打圧を加えた後口頸部が取り付けられたことが明らかである。外面の叩目は(1)、(2)両方とも同じ叩板が使用されたと思うが、内面のあて板は同心円の肉太さが違っている。窯内出土の大甕片は大部分焼成の良好なもので割れ口は鋭利な刃物のようであった。

(柳田康雄)



第 16 図 大浦第 1 号窯内須恵器拓影 (1/3)

4. 大浦第 2 号窯跡

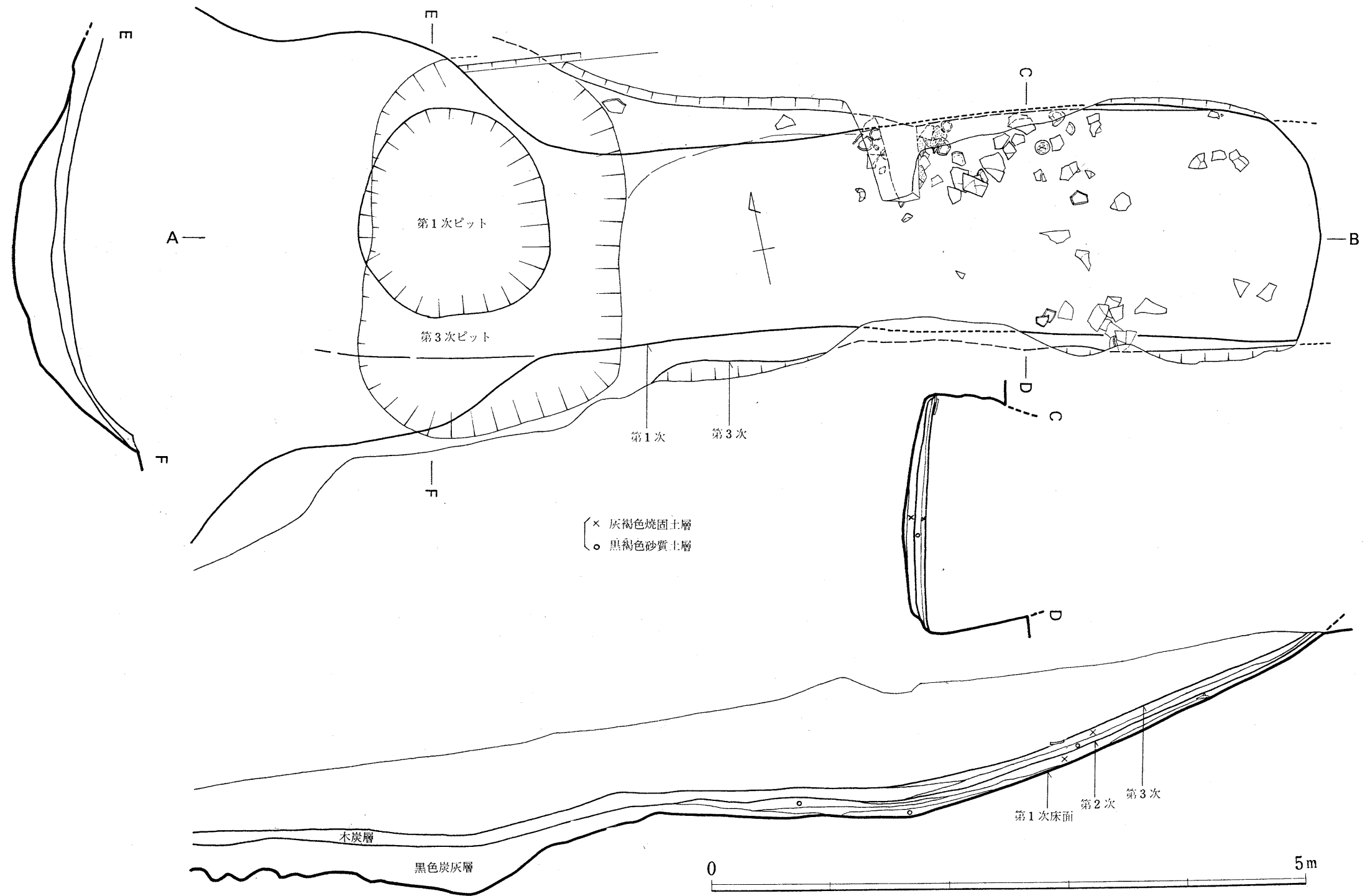
(1) 立 地

第 1 号窯と同一斜面に窯のおたがいの前庭部の一部が重複していとなまれている。1 号窯と同じく窯の上部は削平されている。

(2) 窯 の 構 造 (PL 8・9、第 17 図)

窯は焚口、燃烧部、焼成部を残し、焼成部の約半分から上部が消滅している。残存している窯の長さは 5.5m である。しかし、焚口第 1 次床面は標高約 46.50 m で 1 号窯より低位置にあるので壁の状態はわかりやすい。窯は中軸線を N89°E に花崗岩ばいらん土の基盤に掘りこまれているが、燃烧部の第 1 次床面から確認できた壁の高さ 1.2m の面では壁の外側はばいらん土の地山であることから、地山をくり抜いた地下式の可能性が強い。

前底部 前底部の保存は割合よく、操業時の状態がわかりやすい。焚口前の凹みは、第 1 次では焚口から急に傾斜し凹みとして顕著であるが、第 2 次、第 3 次は焚口からさがるだけで明



第17図 大浦第2号窯跡実測図 (1/40)

瞭でない。凹みの底面はもちろ焼けておらず、一応舟底状を呈する。凹みの中は炭化物、黒色灰が詰っており、この土層中には須恵器、瓦片は少ない。第1次の凹みは窯主軸方向径1.6m、これと直角に1.8mの楕円形で底面に凸凹が多い。第2次は不明であるが、第3次は前庭部の両壁いっばいに広がる浅いものとなり、主軸方向径2.1m、直角に約3.2mを計ることができる。

両壁は焚口から広がりを見せるが、凹みの西端からまた急に広がり自然の傾斜となって消える。

焚口・燃烧部 前庭部の凹みの東側から床面と壁が焼けているので、ここが焚口と思われる。焚口は床面と壁面の接点は丸味をもつが、それから上の壁面は垂直に上がる。床面と両壁面は赤色に焼けているが、塗り壁ではなく地山素掘のままである。焚口の床面幅は第1次で1.6m、第3次で1.8mで、壁はそのままで床上げをしているので、床幅だけ第1次より第3次が広がっている。焚口の両壁面間は2.3mである。

燃烧部は壁面が第1次床面から1.2mの高さ残っており、床面ともに青灰色に焼締っている。焚口から約1.4m付近から壁面はスサ入り粘土の塗り壁となっている。床面は第1次から第3次まで水平であるが、第1次床面は堅く焼締っているのに比して第2次、第3次は黒色灰、あるいは炭化物層がベースとなっているので青灰色には焼締っていない。

焼成部との傾斜変換部の第1次床面には高熱により破碎したと思われる黒灰色によく焼締った瓦片が多数発見されたが、これは第2次床面のベースとして敷かれたものと思われる。幅は傾斜変換部の床面幅が最も狭く第1次で1.8m、第3次で1.9mあり、復原横断面は蒲鉾形をなすと思われる。

焼成部 傾斜変換部から水平距離3.4mを残し、これから上部を夫なっている。床面幅は第17図のC—D断面で第1次1.82m、第2次1.86m、第3次1.98mとなり次第に広がっている。床面の傾斜は第1次19°、第2次13°となり次第にわずかであるがゆるい傾斜となっている。

壁面はスサ入り粘土による塗り壁が残っていることから、少なくとも最終操業時には塗り壁であったことがわかる。

窯の改修 第17図及びPL8の遺物の出土状態は最終操業時の遺物出土状態であるが、前庭部及び燃烧部の調査の際に遺物の出土状態や床面の具合から数次にわたる操業の可能性が考えられたので、最終操業時（第3次）における窯の状態を調査後、第2次、第1次における窯の状態を順に調査した。各次の各部分における窯体変化は前記のとおりであるが総括すると、前庭部では第3次に至って凹みが広くさらに浅く変化し、燃烧部は両壁間は変わらないが、炭灰の堆積により床幅が広く平らになってくる。燃烧部の各次の炭灰層の厚さはそれぞれ13cm～14cmであるが、焼成部の上に行くにしたがって薄くなるので焼成部傾斜はゆるくなってきている。この壁にも同時に改修が行なわれて次第に幅広がっている。第17図に示す第2次と第

3 次床面の間にもう 1 次の作業面が考えられるが、床面の焼締りがよくないので確実ではない。

(3) 遺物の出土状態 (PL 9)

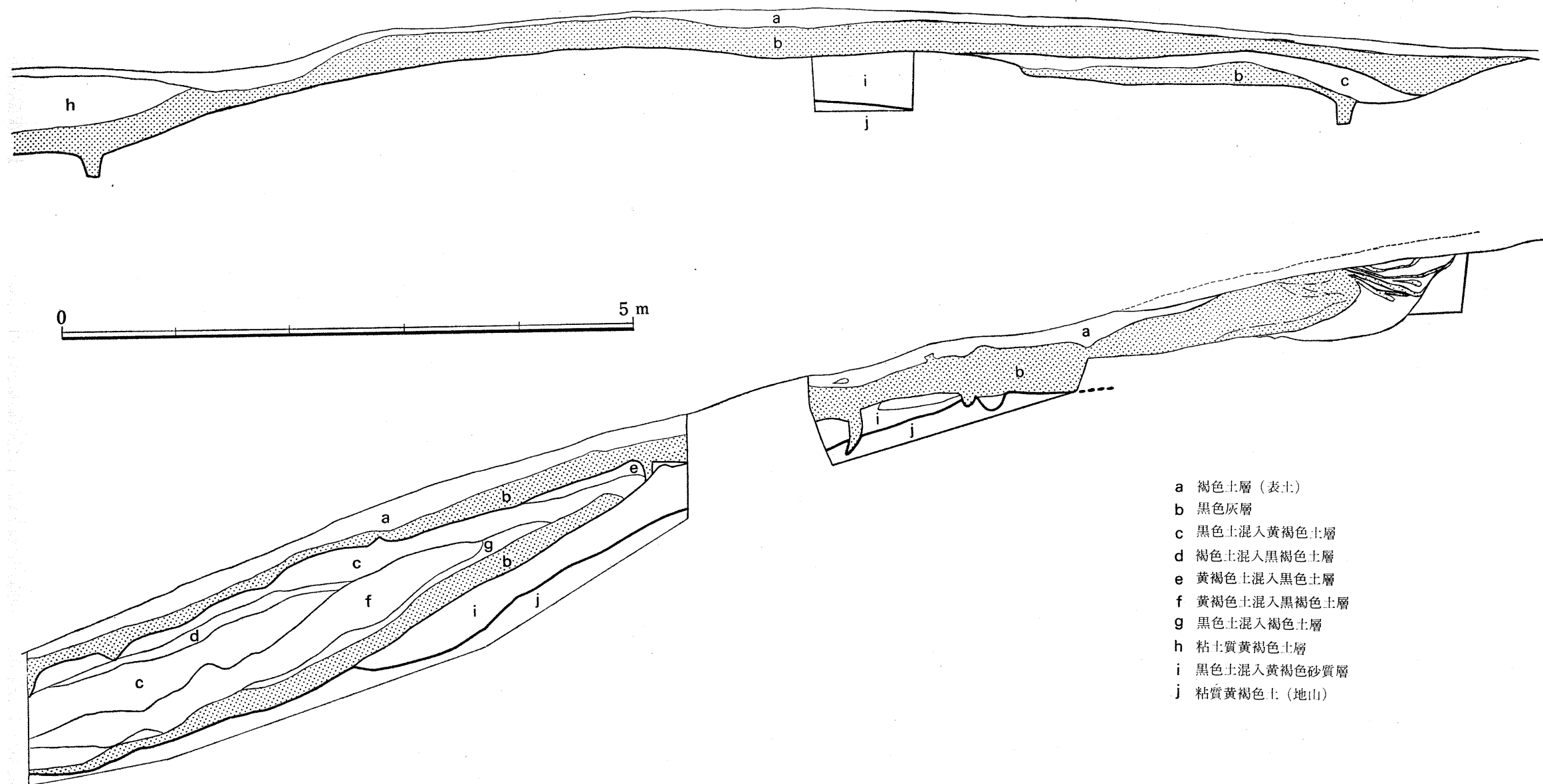
最終床面直上の傾斜変換部から約 2 m の間には第 17 図、PL 8 のように北壁にそってほぼ原位置に近い状態で須恵器が発見された。これは大甕片を含む蓋杯がほとんどであるが、中に径 10cm 内外の砂を多量に含み青灰色に焼締った粘土塊が 2、3 個含まれている。粘土塊と大甕片は置き台の可能性もある。

第 2 次床面には遺物は少なく、少量の大甕片を発見したにすぎない。

第 1 次床面は瓦片が最も多く、次に大甕片、杯となっている。ただ 1 個だけ PL 9 のように完形の宝珠形つまみの蓋が瓦と伴出している。傾斜変換部には瓦の細片が多く、高熱により破碎したものと思われる。

(4) 1 号・2 号窯跡灰原の調査

1 号窯、2 号窯は前庭部が重複しているので平面的にはほとんど 1 つの灰原を形成している。この灰原は道路で下方を切断されているので確実ではないが、灰原全面調査によると両窯焚口から下方に扇形に広がる。灰原の状態から、幅 1 m のトレンチを斜面に平行するものと直行する 2 本で 4 地区に区分し、トレンチ断面の観察の後、灰原の全体を平面的に調査した。これによると灰原は、水平距離で長径約 14 m、短径 13 m の楕円形をしている。黒色灰層は現地地表下に 1 層とその下に 3～4 層の間層をおいて、粘質黄褐色土の地山の上にもう 1 層ある。この粘質黄褐色土の下には花崗岩ばいらん土の基盤があるので、粘質黄褐色土は旧地表と考えられる。また両窯前庭部付近から水平距離で約 5 m の間には黒色土を含む花崗岩ばいらん土（黒色土混入黄褐砂質層）が堆積しているが、これは黒色灰層の下にあることから 1 号窯構築の際に排土されたものであろう。この上にある黒色灰層は須恵器を多量に含むが瓦片はない。須恵器も第 21 図、のようにⅣ形式のみで他の形式をほとんど含まず、含むといえ、むしろ古いⅢB 形式にはいりそうなものが 4～5 片発見された。この黒色灰層は第 18 図東—西断面図では窯につながるが、灰原北側では表土下の黒色灰層と重複して 1 号窯につながる。1 号窯が作業を中止した後 2～3 層の堆積があり、また黒色土混入の黄褐色土が、表土下黒色灰層の下に堆積している。これも地山の上に堆積しているものと同様なものであるから窯構築の際の排土と思われる。1 号窯前庭部付近がかなり削平されているので、1 号窯と灰原各層との関係は明瞭でないが、表土下黒色灰層は 2 号窯に続くものであることは明らかである。さらにこの層には須恵器のほかに瓦を多量に含むことから表土下黒色灰層は 2 号窯の灰原であり、地山に接する



第 18 圖 大 浦 窯 跡 灰 原 斷 面 圖

黒色灰層が1号窯のものであることは確実なものといえよう。平面的には、灰原の周辺部ではこの2層が重なるので各々の範囲は区別しがたい。しかし、瓦の出土範囲は南半に特に多いことから、窯の位置と同様に多少南北にずれているようである。

灰原の南北断面図(第18図)を見ると中央が高く、両端がくぼんでいることがわかる。この北側は不明であるが、南側については2号窯前庭部南壁と断面図くぼみの南面と続くかっこうになり、さらにこれはわずかに溝状を呈し、灰原南端の輪郭線となっている。これは一種の排水の用をなすものではなかろうか。両端の柱穴状のものは不明である。

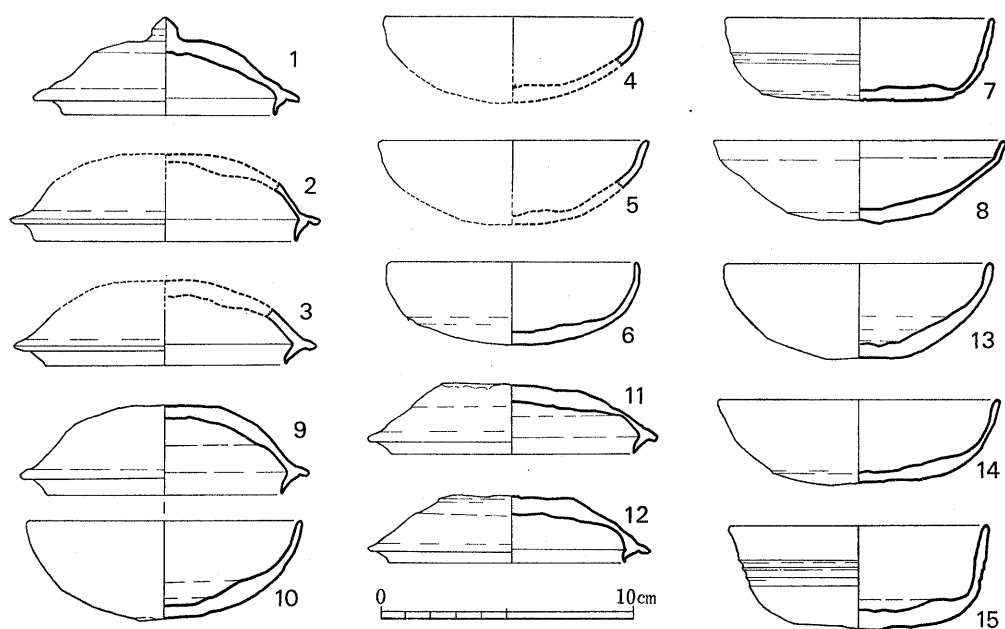
(5) 2号窯内遺物 (第19図)

窯内の須恵器は大甕片と杯類のみであるが、とくに杯類で蓋と身の区別をつけがたいものがあるが、一応蓋と身の別は図面のとおりとした。

杯 蓋 (1~3・9・11~12)

形態の上から3類に分類できる。

〔I〕 宝珠つまみをもつもので、第1次床面から径10.7cmの無傷のものが1個出土した(1)。口縁部内面のかえりは長く、口縁からほとんどがとびだすものである。器面全体に横なで調整が行なわれているが、宝珠つまみのまわりの天井部に一部ヘラ削りの痕跡を残しているので、



第19図 大浦第2号窯内須恵器実測図 (1/3)

1~7—第1次床面, 8—第2次床面, 9~15—第3次床面

天井部のヘラ削りの後つまみが取付けられたものと思われる。

〔Ⅱ〕 第1次から第3次床面に通じてみられるもので、蓋と身の判定がつきにくいものである(2・3・9)。〔Ⅲ〕類と比べると天井部が丸く、深くなっている。径は12cm前後で小形のものである。(2)・(3)は第1次床面のものであるが発見されたのは破片2個体分のみであった。第3次床面の(9)と同様なものと思われる。これらは割れ方によると粘土ひもの巻上げによる成形の後、横なで調整で仕上げられ、ヘラ削りの痕跡が見られないものである。

〔Ⅲ〕 第3次床面のみで見られるもので、径12cm内のもで〔Ⅱ〕に比較すると天井部が不調整で平らになり、浅くなっている。(11)の天井部には左巻ラセン状の渦巻が残り、天井部の平らな部分は整調されていないことがわかる。その他は横なで、内面の中心部のみなどによる調整がなされている。

杯蓋では2号窯操業当初から宝珠つまみがあらわれるが、灰原の須恵器からも発見例が微少であり、形態から見ても宝珠つまみの初現的なもののようである。なお、第3次操業時には(11)・(12)のような浅いものが現われることは、(2)・(3)・(9)は蓋ではなく身として存続し、その中に宝珠つまみの蓋が現われる可能性もある。

杯 身 (5・8・10・13～15)

形態のうえから3種に分類できる。

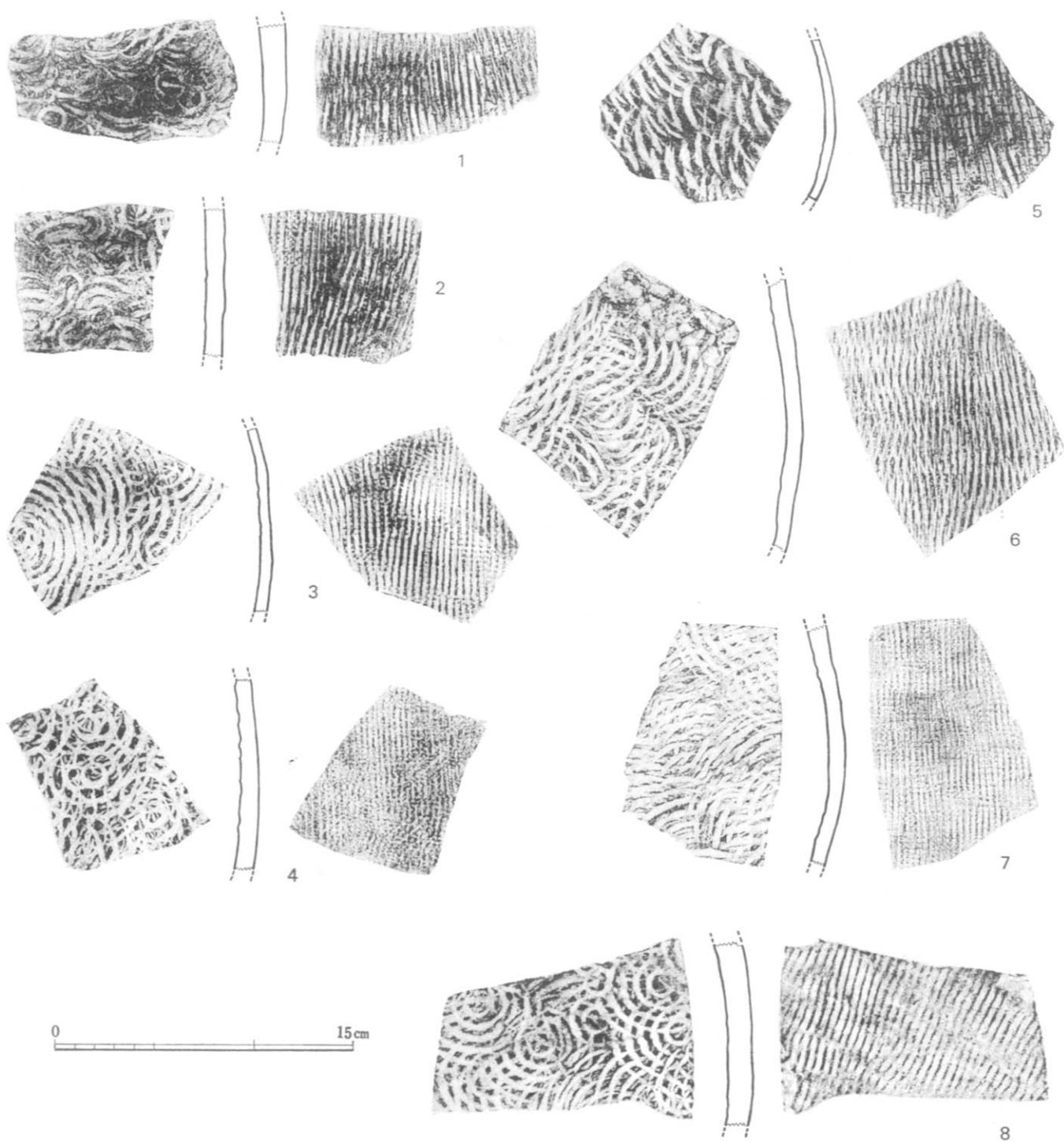
〔Ⅰ〕 蓋の〔Ⅱ〕類とセットになると思われるもので1次から3次に見られ、とくに3次床面からは多数発見された(4～5・8・10・13～14)。径11cm前後の小形で底部は丸く、調整されず、3次床面のもは大部分平行線2本のヘラ記号がある。底部の他は横なでによる仕上げがなされている。

〔Ⅱ〕 第1次床面に1個体発見されたもので、底部は丸いが、縦にヘラ削りがなされ、縦横各々4本の細線による格子目が刻まれている。さらに〔Ⅰ〕と比較すると口縁が内彎ぎみである。径10.3cmの小形である(6)。

〔Ⅲ〕 第1次と第3次床面に各々1個発見されたもので、宝珠つまみの蓋とセットになると思われるものである(7)・(15)。平たい底部と胴部の境が明瞭で、胴部に1～3条の沈線がはいり。底部は調整されず、(15)には巻上げの痕跡を残している。胴部は内外とも横なでであるが内面中心部は方向の一定しない方向で仕上げられている。1次のものより3次床面出土のものが少し深くなっている。

甕 (第20図)

窯内では胴部の破片のみで口頸部をみいださなかった。第1次床面のもは共伴する瓦の叩目とまったく同じといえるような平行叩板が使用されているが、(2)・(3)は少し横の線が出て格子目状を呈する。しかし、内面の同心円は各々違ったあて板を使用したようである。第2次以後は全体に細い叩目になるが、中には(5)・(8)のようなものもある。



第20図 大浦第2号窯内須恵器拓影 (1/3)

(6) 大浦窯跡灰原出土遺物 (第21・22・23図)

灰原は前記のように大量の遺物を含む黒色灰層が上下2層あり、下層が1号窯で上層が2号窯と思われるが、半分は重複している。

杯 蓋 (3・5～7・21・23～27)

形能から3種に分類できる。

〔Ⅰ〕 これはさらに大きさによって2類に細分することができるもので、径13cm位のものをa類(3・5～7)、11cm位のものをb類とする。a類はb類より古く、a類はⅣ期、b類はⅤ期に属するものである。a類は2号窯内では発見されなかったが、b類は2号窯内の杯身〔Ⅰ〕類と形態等同一のものであり、口縁端が直立するので蓋として扱った。

a類は比較的大形で、天井部はヘラ削りがなされ、他は横なで調整を行なっているが、口縁端の曲り具合でⅣ期の新旧に2分できる。(3)・(5)・(6)は古く、(7)は新しいものであろう。Ⅴ期からは小形化する傾向があるので、(23)はⅤ期の古いものとする。

〔Ⅱ〕 かえりをもつが、つまみのないもので、2号窯内の〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕類に当り、ヘラ削りが行なわれないものである(25)・(26)。

〔Ⅲ〕 宝珠つまみをもつもので、口縁内側にかりを有する。(27)は2号窯内のもの(第18図1)と同形態のものであるが、(28)・(29)となるにしたがいかえりが退化していく傾向がある。しかし、つまみのまわりのヘラ削りの痕跡は残っている。これは(30)のような杯の蓋となるもので蓋をして焼いたらしく蓋に杯の破片がゆ着しているものがある。

杯 身 (4・24・30)

形態から2種に分類できる。

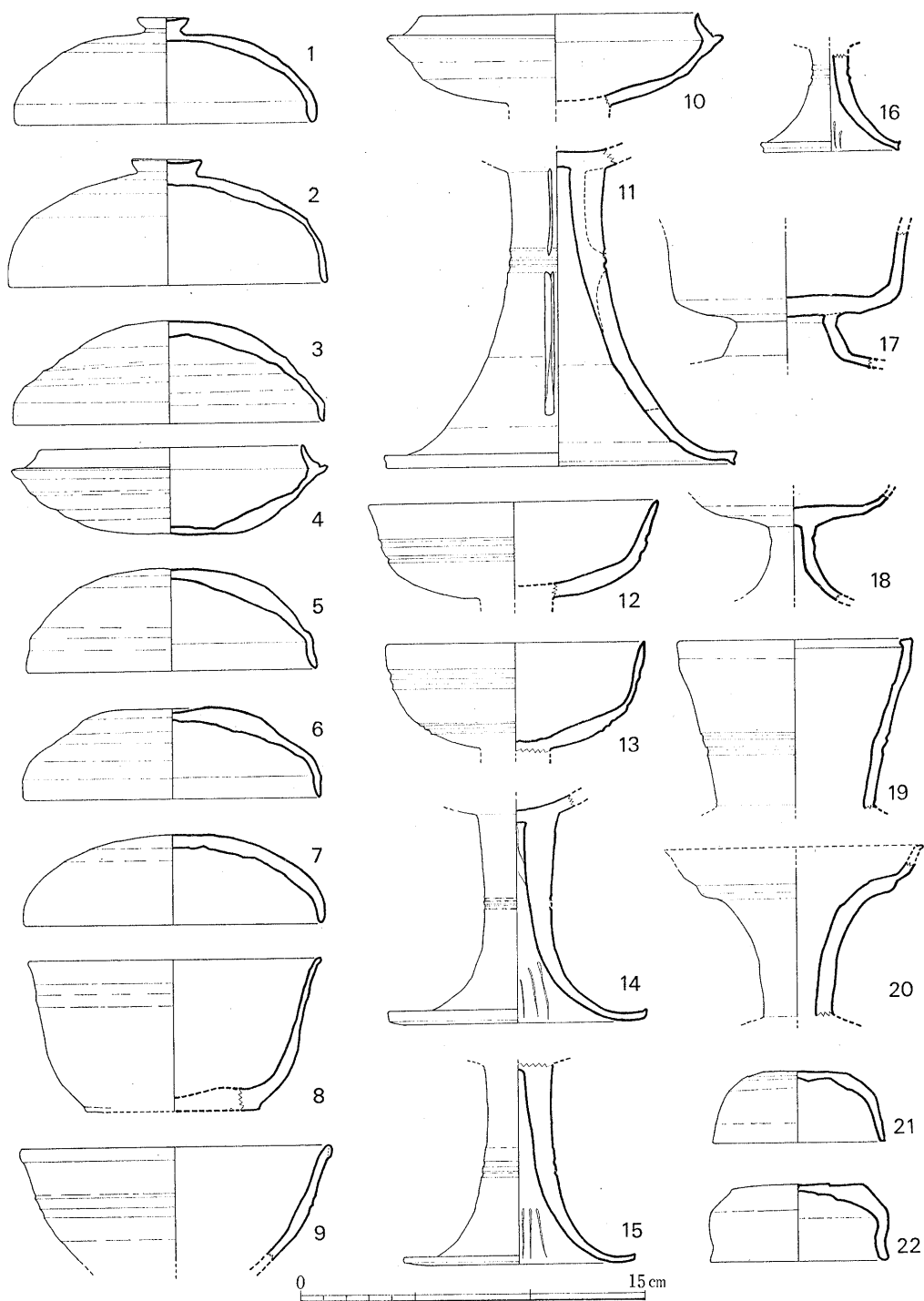
〔Ⅰ〕 蓋〔Ⅰ〕類とセットになるもので、蓋と同様に大きさによってa類(4)とb類(24)に分ける。両方ともに底部はヘラ削りが行なわれている等、同様な成形が行なわれているが、a類をⅥ期、b類をⅤ期とする。

〔Ⅱ〕 2号窯の杯身〔Ⅲ〕類(第18図7・15)と同形態のものである(30)。

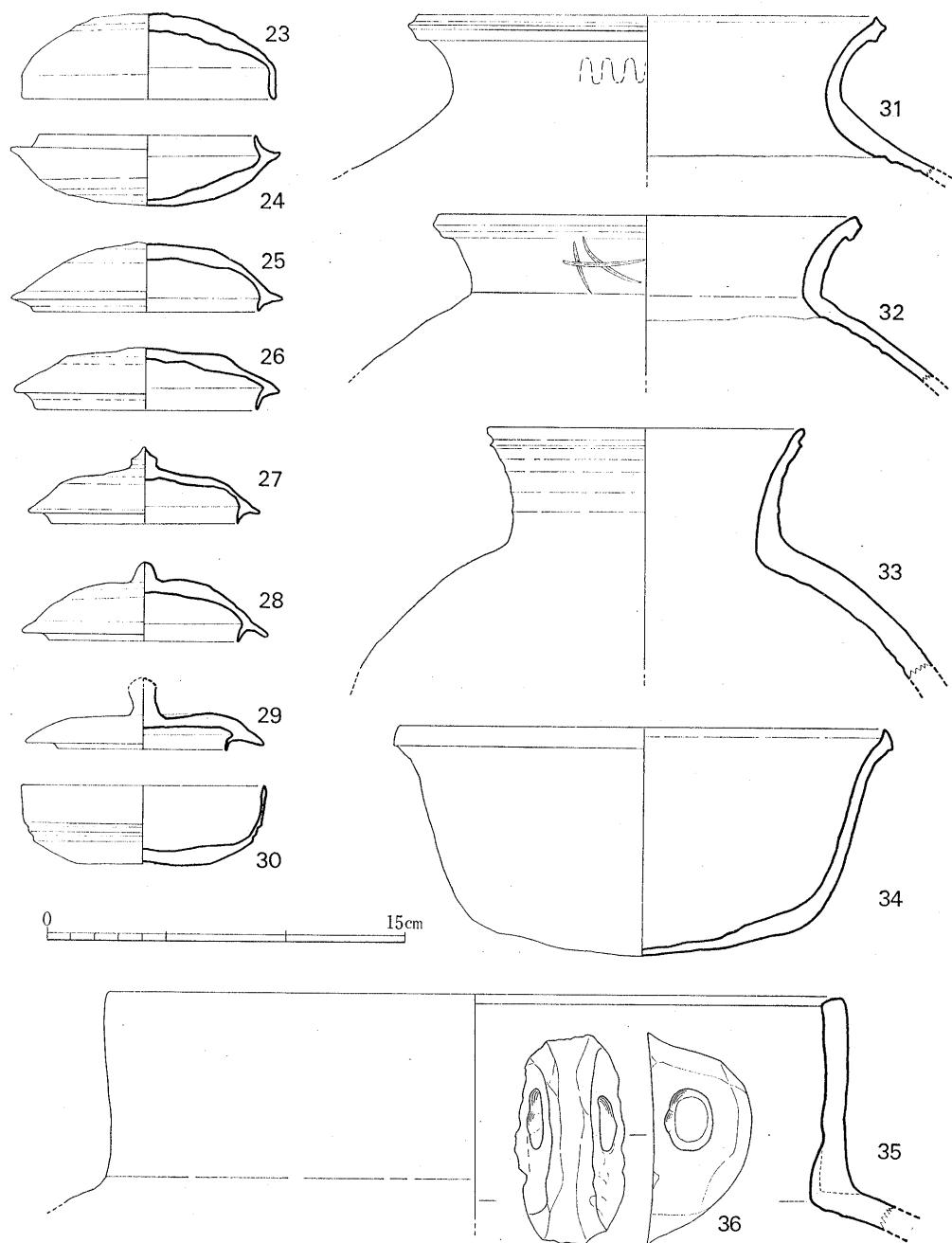
高 杯 (1～2・10～16)

形態から5種に分類する。

〔Ⅰ〕 杯身〔Ⅰ〕—a類に二段透しの脚がつく有蓋高杯で、大浦窯跡発見須恵器中最も古いものでⅢ期に属する(10)・(11)。この蓋には(1)・(2)がセットとなるものと思うが、(1)よりは(2)の方が古い形態を残している(11)の脚のように2段透しの場合は(2)の蓋が付くものと思う。(11)の脚は大形のもので、一応2カ所2段透しの形態をとるが、上段はヘラによって切り込んであるだけで、裏まで通っておらず、下段も一部透しとなっているだけのもので、透しの退化形式のものと思われる。したがって〔Ⅰ〕類の高杯はⅢ期の新しい方に位置づける。



第 21 图 大浦窯跡灰原出土須恵器実測図(1) (1/3)



第 22 図 大浦窯跡灰原出土須恵器実測図 (2) (1/3)

〔Ⅱ〕 (12)・(13)のように胴部に2～4本の沈線をめぐらす杯部に(14)・(15)のような透しのない脚部がつくものである。脚は2条の沈線を施した筒形の胴から急に裾の開くもので、興味あることにこの類全部に内面に3条のヘラ記号がある。杯部にはヘラ削りは見られない。

〔Ⅲ〕 〔Ⅱ〕と共伴する小形のもので、脚は裾から急に細くなり、この部分に2本の沈線をめぐらす(16)。杯部は巻末編年図のように底部の平らなものがつく。これも〔Ⅱ〕類と同じヘラ記号を有する。

〔Ⅵ〕 1個体発見されたものであるが、他と違った形態を示す(17)。一応高杯とすると深い杯部に低い脚がつくもので、上部黒色灰層で発見された。底部のヘラ削りの後、脚を接合しているようで、杯が深い点から台付碗といえるかもしれない。

〔Ⅴ〕 杯身〔Ⅰ〕ーb類に脚のつくもので、杯底部にはヘラ削り調整の痕跡がある。Ⅴ期の古いところに位置するものであろう。

碗 (8・9)

(8)は平底を有するもので、口縁は外反する。(9)は内彎ぎみで、口縁端はふくれる。両方とも胴部に不明瞭な沈線がめぐる。

壺 (19)

これを壺の口頸部と見るのも疑問な点があるが、一応図面のとおりととして扱う。2の沈線がめぐり、外面は横に櫛目調整がなされ、内面は横なで調整である。

甗 (20・巻末編年図)

(20)は胴部と口縁を欠き、口縁近くに段を有するが、波状文等の文様が施されない。編年図使用のものも文様はないが傾斜変換部に沈線を施す。全面は横なで仕上げである。

杯以外の蓋 (21・22)

両方とも径7.8cmの小形のもので埴の蓋と思われるものであるが、巻上げによる成形の痕跡がある。(21)は外面のほとんどがヘラ削り調整で、天井部は丸味をおびていい。外面の口縁と内面は横なで調整である。以上の点からⅣ期前半以前に位置づけてよいものである。

(22)の平らな天井部は調整されず、胴部の天井近くが一部ヘラ削りがなされ、他は横なで調整である。両方とも天井部に×印のヘラ記号がある。

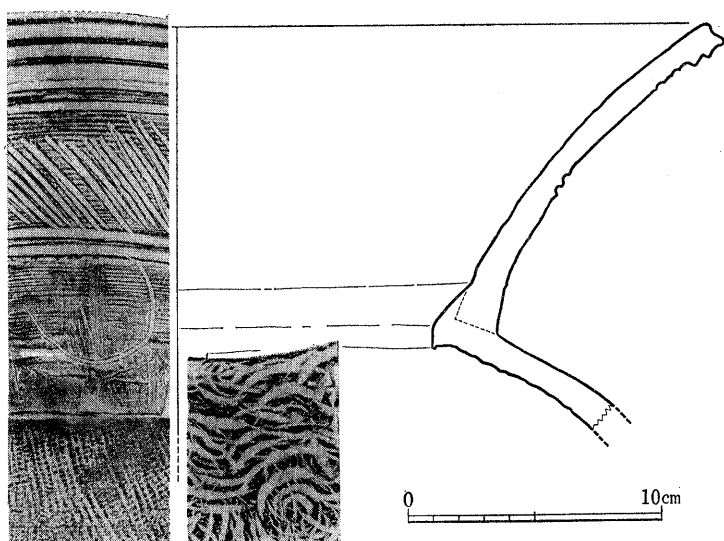
甕 (31～36, 第23図)

口縁の形態により4種に分類できる。

〔Ⅰ〕 中形のもので、口縁部の形状で3類に分ける。

a類は(31)で、口縁端上部にかえり状のはねあがりがあり、ないものをb類(32)とする。類はb類よりも内外の叩き目は大きく荒い。a類は上部黒色灰層、b類は下部黒色灰層から出土している。

〔Ⅱ〕 割合頸部の細い甕で発見されたのは1個のみであった(33)。全体に胴部が丸い感じの



第 23 図 大浦窯跡灰原出土須恵器実測図 (3) (1/3)

するものである。

〔Ⅲ〕 大形のもので、口縁端外面に 3 つの段を有し、その下にはそれぞれ 2 条の沈線の間にヘラ描き斜線を施す。口縁は全体に外反しラップ状に大きく広がる（第 23 図）。

〔Ⅵ〕 須恵器甕としてはかわったもので、胴部から直立する変化のない口頸部をもつ（35）。胴部内外の叩き目は磨消されたように不

明瞭なものである。口頸と胴部の接合は〔Ⅲ〕の大甕とまったく同じ手法である。器体は全体に茶褐色をしており、別に(36)のような把手が 2 個出土しているが、あるいはこのような甕に付くものではなかろうか。

鉢 (34)

口径の割に深く感じるもので、底は一部ヘラ削りがあるが全体に不調整で大きく×印のヘラ記号がある。胴は横なで調整で口縁近くで外反し、口縁端ははねあがり状になる。

瓦 (第 24・29 図)

平瓦と丸瓦とが発見されたが、軒先瓦は 1 片も発見されなかった。灰原全域を調査しての結果であるから軒先瓦は製作されなかったものと考えられる。

平瓦、丸瓦ともに内面に布目、外面に平行叩目が残っているが、(1)のように内面に糸切痕と思われる平行条痕が全面にあり、その中に一部布目が見えるものと、(5)のように条痕、布目の後から同心円の叩目が印されているものがある。さらに(3)は条痕、布目の後から円形体のもので叩きしめられているものもある。外面の平行叩目は第 2 号窯跡第 1 次床面で瓦と伴出する甕外面の叩目と同種のもので、下方から上部へたたきあげているが、割合密にたたいているために叩板の大きさがつかめない。

平 瓦 (第 24 図 1・3・5、第 29 図 2～6)

完形品がないので瓦の大きさを正確に知ることはできないが、第 29 図(6)によれば上端幅が約 27cm で、下方幅が次第に広がる形式のものであることがわかる。長さは不明である。

前記のように内面には、平行条痕→布目→叩目の順にその痕が残っていることと、第 29 図(4)

に見えるように模骨の痕跡のあるもの、さらに瓦に粘土の継目が縦に走るものがあることから粘土角材を糸によって引切り、できた粘土板を布の覆った桶型に巻きつけ、叩板でたたきしめた後、桶型を抜き瓦を切離す方法がとられたことが考えられる。この時瓦の厚さは、焼成後で0.9~3.0cmのものがあるが、1.5cm前後のものが最も多く、全体に薄い瓦である。瓦は下方が広がるものであるから、桶型は円錐台形になるが、その大きさは瓦の完形品がないので割出しが困難である。第29図(6)によると、上端の弧線の半径が17.8cmである。また他瓦片によれば、半径11.9cmから29.5cmの円が復原できる。11.9cmはとくに小さいものとして、桶型は上端半径が約18cm、下端半径が30cm以上のものが考えられる。模骨となる桶型は第24図(2)及び第29図(4)によると幅1.5cmから2.5cmの細板が使用されている。

瓦は桶型が抜かれた後、内側から切込まれて切離されると思うが、切離したあと瓦端は面取り整形されないので、その痕跡を残していない。この面取りは内面に叩文がある場合はその後になされているので、最後の仕上げとして行なわれたことになる。面取りと同時に内面では第29図(6)のように上下、あるいは不規則にヘラで削り、布目を消しているものもある。また同様に、外面も平行叩文をヘラ等で消しているものもある。

桶造法がとられた以上4枚造りが一般的であろうと思うが、川原寺では3枚りの方法も報告されている^①ので、大浦でも第29図(6)について検討してみる。断面図によると直径44cmの円が復原できるのでこの円周は138.16cmとなる。これを4等分すれば24.54cm、3等分すれば46.05cmとなる。第29図(6)の弧の長さは33.5cmであるから4等分した34.54cmに近いことになる。4等分した寸法より少し短かいのは瓦端のヘラ削り整形によるものである。

丸瓦 (第24図2、第29図1) 平瓦と同様に模骨の使用など造瓦法は同一形態をとっているが、内面に同心円の叩文はみられない。寸法は幅、長ともに知ることはできないが、内面半径は4.4cmから9.7cmのものを復原できる。半径7~8cmのものが多い。玉縁をもったものが発見されないので行基葺形態をとるものと思われる。内面には模骨と布目の痕跡があり、さらに瓦の下端と思われる側に幅約1cmの帯状の凹みがあり、また約9cmの間隔をおいてもう1本帯状の凹みがあるものがある。これは木型のタガのようなものであろうか。

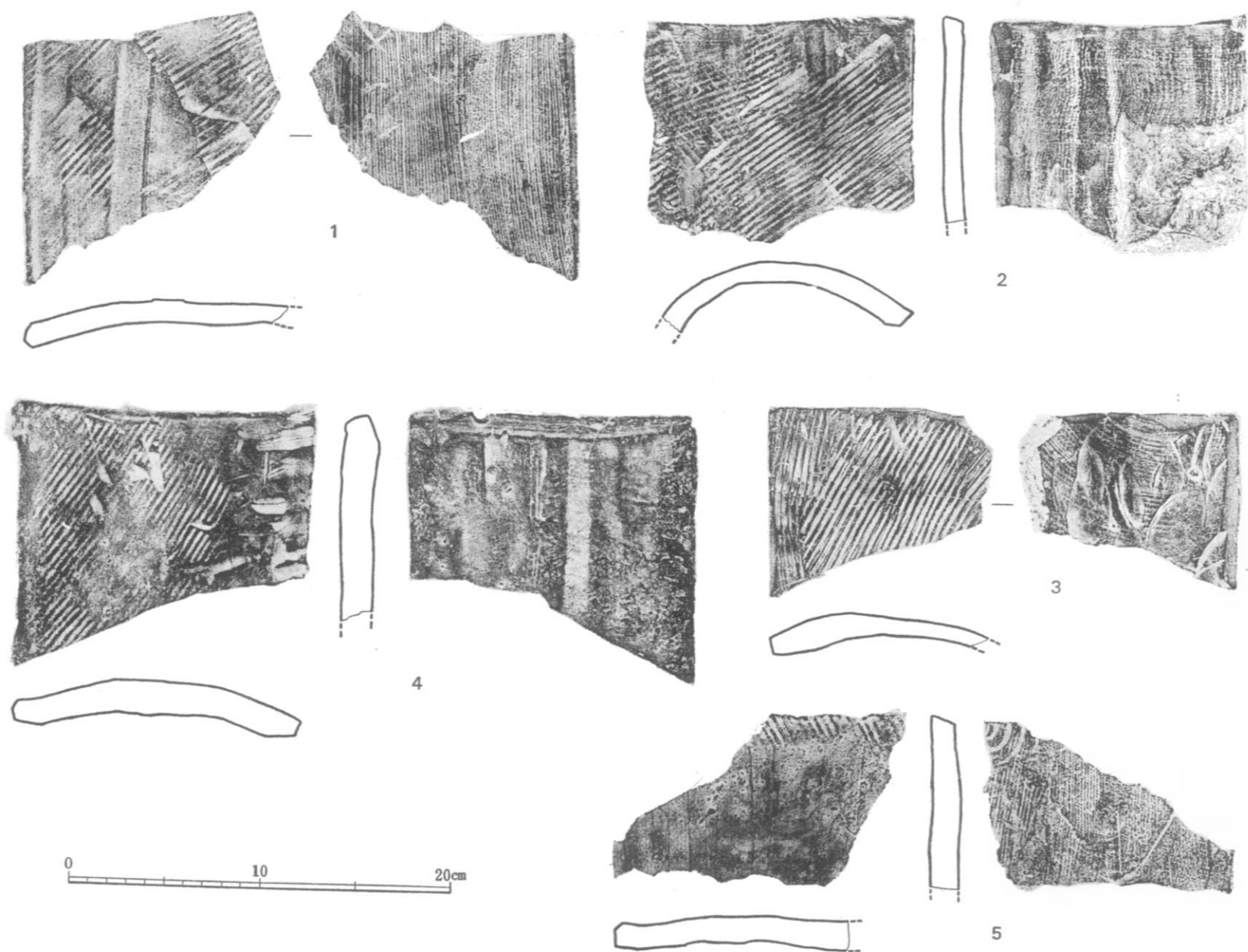
熨斗瓦 (第24図4) 熨斗瓦は1点を発見したにすぎないが、幅は十分に知ることができた。これによると幅15.3cmで、内面半径約16cmを計測することができる。したがって『天工開物』^②に述べられているように熨斗瓦は平瓦をさらに2分して作るということに従えば、円周100.48cmの8等分は12.56cmになる。熨斗瓦の弧の長さは14cmであるから最も8等分の数値に近いので平瓦を2分する寸法となる。

外面には平行叩文があるが内面は模骨の痕跡と思われる縦の凹みの線しか残っていない。風化しているせいもあるが、大半は削り取られているようである。瓦端はヘラ削り整形がなされている。

(柳田 康雄)

註 (1) 奈良国立文化財研究所編「川原寺発掘調査報告」(奈良国立文化財研究所学報第9冊、昭和35年)

(2) 小林行雄「続古代の技術—IV屋瓦」(昭和39年)



第 24 图 大浦第 2 号窯跡出土瓦拓影 (1/3)

(7) 小 結

以上大浦第1・2号窯跡の窯体、出土遺物の概要について述べたが、次にこれらに関する問題点を少しまとめてみたい。

1・2号とも窯体は半分以上が破壊されていたので、全容を知ることができないが、その規模については推察できる。窯体の幅が両方とも2 m以上あることから、窯の長さもこれに比例した長大なものであらうと思われるからである。この長大な窯なぜが現われるかは、牛頸窯跡群の性格が明らかでない以上推測にとどまるが、大浦窯跡調査後、同年12月の国士館大学の東浦窯跡群の調査、本報告の野添窯跡群と筆者の分布調査の際の所見からするとⅣ期には特に長大化するようである。これについて極論はできないが、牛頸窯跡群発展段階にあってⅣ・Ⅴ期の時期に何らかの変換期があったであらうことはいえるだろう。

前庭部の凹みについては、何のためのものであるかは明らかではないが、操業以後はほとんど必要としなかったらしく、次第に浅くなっている。また凹みには黒色灰というより純炭化物といってよいほどのものが詰っており、遺物をほとんど含まない。これは操業当初、あるいはそれ以前で必要とされた遺構であることを物語っている。

遺物からみると、1号窯はⅢ期後半に操業が開始され、Ⅳ期後半に及ぶことがいえるが、Ⅲ期のものが少ないことは、本格的な操業がⅣ期初頭に始まることを意味するものであらうか。

2号窯は須恵器から見てⅣ期末に始まるようであるが、1号窯と共存しなかったことは前記のとおりである。第1次操業に宝珠つまみと共に瓦が出現するが、第3次に至っても高台が現われないことはⅤ期でとどまるものである。

須恵器についてみると器形としては杯が量的に多く、杯身のかえりが蓋となる過渡期にあたる径12cm前後のもの(第19図)が特に多い。実測図にあげた以外に平瓶の小片もあるが、提瓶が見られなかった。大浦窯跡の須恵器で問題になるのは、宝珠つまみが出現するが、高台付杯があらわれないことは限定された時期のもので、2号窯は宝珠つまみ出現当初のものといえるのではなからうか。したがってこれに伴う瓦も限定されたもので、さらに第2次操業以後にはまったく生産された形跡がない点からいっそう瓦生産の時期が限定されてくる。

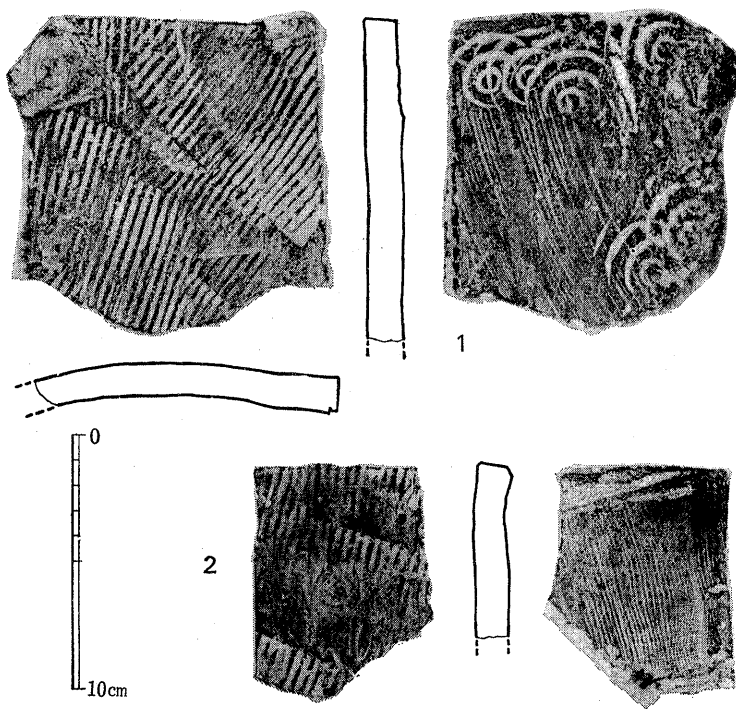
2号窯内で発見される瓦は第1次床面のみに限られていることから、瓦と須恵器のどちらが先行したかが問題になる。第1次床面の遺物の出土状態を見ると第24図(1)～(3)以上の大きな瓦の破片はないが、須恵器は第19図(1)・(6)の2個が無傷の完形品であった。このことは2号窯において須恵器生産が瓦生産と同時にありえても先行しないものであるといえるのであらうか。瓦外面の平行叩文が伴出する須恵器大甕外面の叩文とまったく同じであり、さらに内面には同心円の叩文も残っているものがあるとは、これが同一の工人集団で生産されたことを物語っている。

大浦2号窯跡出土と同様な瓦が春日町大字春日字平田で福岡大学の肥山正秀君によって須恵器とともに採集されている(第25・26図)。採集したのは畑であるが、近くに灰原が露出しているので地名表には春日平田窯跡として扱った。第25図(1)は表面に糸引痕が残り、その後から同心円の叩目がつけられている。瓦端は面取りが行なわれ

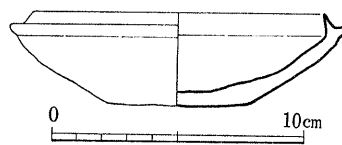
ていないので、内側から切込んだ痕跡があり、4枚造りであることは明らかである。(2)は表面に糸引きの痕と布目が残っているが、布目は大浦のものより細かいものである。側縁は面取りがしてあり、背面の平行条線の叩目は大浦と同様なものである。

この春日平田出土の瓦に第26図の杯がともなう確証はないが、参考にはしうるもので、大浦と同時期のIV期末からV期にかかるものとして、大浦窯跡から1.2kmのところでも同時期に瓦の生産をしていたことは興味深い。

(柳田 康雄)



第25図 春日平田出土瓦拓影 (1/3)



第26図 春日平田出土須恵器

第 4 総 括

1. 野添・大浦窯跡の構造と特色

発掘調査を行なった4基の窯跡の規模、構造を整理すれば次表のようになる。

	長さ (cm)	幅 (cm)	高 さ (cm)	方 位	傾 斜	生産遺物
野 添 6 号						
第 7 次	500 (+)	145—230	120	N44°W	15°	須 恵 器
第 1～6 次	500 (+)	130 193 └ — ┘ 135 237	190—140	N44°W	20°	
野 添 9 号						
第 3 次	1000	180—220	70—120—35	N38°W	22°	須 恵 器
第 1～2 次	1000	180—220	80 120 └ — ┘ — 35 105 130	N38°W	22°	
大 浦 1 号	780 (+)	240—270		N78°E	26°～28°	須 恵 器
大 浦 2 号	560 (+)	230—		N89°E	13°～19°	須恵器・瓦

このうちで窯跡全体を完全に発掘できたのは野添第9号窯だけである。そのほかはいずれも完全に発掘することができず、焚口から焼成部の一部に及ぶ窯の前半部を調査するとどまった。牛頸窯跡群はその多いのにくらべて発掘調査されたものは野添、大浦の4基のほかは大川清氏の行った東浦窯跡3基があるだけである。したがって本報告書が牛頸窯跡群としてははじめてのものとなったのである。そこで将来さらにつづけられる場合に備えて本窯跡群の性格の一端を予察して今後の参考にしておこう。

後述するように生産された須恵器の編年観にもとづいて窯跡の年代を比定すれば、

野添第6号 (須恵器第ⅢA期)
 ↓
 野添第9号 (須恵器第ⅢB期)
 ↓
 大浦第1号 (須恵器第Ⅳ期)
 ↓
 大浦第2号 (須恵器第ⅣB～V期)
 ↓
 野添第4号・第5号 (須恵器第Ⅶ期)

という順序が成立つ。

発掘された野添・大浦窯についてみると、細長く胴ふくらみある平面形で、燃烧部と焼成部の境界が明瞭でなく、床面の傾斜は13°から26°という緩傾斜を示している点で共通した形態を示している。野添第9号窯で全長10mを確かめられたのはその他の窯跡の復原形を考える上

に参考になろう。このなかで野添窯跡と大浦窯跡の相違は、前者が6世紀中～後半代、後者が6世紀後半～7世紀初めてという時代的な前後関係のほかに、前者は山丘の尾根近くの高所に位置し、平地からの比高は10mをこえるのに対して、後者は緩傾斜の丘陵末端に位置して平地に近いところに構築されている点が最も注目をひくのである。しかしこのような立地上の相違が須恵器第Ⅲ期と第Ⅳ期の窯跡立地上の通性というわけにはゆかない。先年調査した筑後、八女市塚ノ谷窯跡⁽⁴⁾における第4号窯（須恵器第ⅢB期）と第1・2号窯（須恵器第Ⅴ・Ⅵ期）の立地はその逆の在り方を示しており、同中尾谷窯跡⁽⁴⁾（須恵器第ⅢA期）では低位から高位への推移がみられた。また須恵器第Ⅳ期の豊前北九州市宇土窯跡⁽⁵⁾、同京都郡苅田町向野窯跡⁽⁴⁾では野添窯跡に似た立地を示している。また先年大川清氏が調査した東浦窯跡は大浦1号窯とはほぼ同時期に比定できる須恵器を生産しているが、これは大浦窯跡に近い立地を示している。したがって須恵器窯跡の立地が各時期によって地域的に共通する原則というようなものは今のところ指摘できないように思う。むしろこれまで調査した範囲で総合すれば窯の構築にあたっては各地における地形と風向き、風の強さなどがかなり重視されて位置が選択されていると思われる。陶土の採掘、燃料源、湧水などの条件は必ずしも第一義的な条件であったとはいえないのではなかろうか。前著にも指摘したような6世紀代と7世紀以降の窯構造の相違は技術革新の面からの説明が妥当であろう。我々は現在までのところ豊前、筑後、筑前の順に6～7世紀代の須恵器窯跡の発掘を行ってきたが、以上のような問題についてはさらに肥前、肥後、豊後方面にも系統的調査を及ぼしてゆき、もっと広く検討してゆかねばならないと考えている。

今回の野添窯跡調査にあたっては3回から7回までの操業時における窯改造の事実を確かめることができた。野添6号窯では第1次から第7次までの床面の高さは70cmの厚さに及んでおり、それがきわめて短期間の改造であったことは注意すべき事実であった。それに応じて天井の構造が地下式の割りぬき技法から豎掘り貼天井の半地下式への変化も考えられることを指摘しておいた。このことは先年豊前北九州市トギバ窯跡⁽⁵⁾（須恵器第Ⅶ期）の発掘調査の際にも同様な事実に出会ったのであるが、今後解決をえたいと思っている。

（小田 富士雄）

註 (1) 八女市教育委員会「塚ノ谷窯跡群」（昭和44年）

(2) 同 上 「中尾谷窯跡群」（昭和45年）

(3) 昭和31年調査、遺物については次の文献がある。

小田富士雄「九州の須恵器序説」（九州考古学22号 昭和39年）

(4) 昭和43年調査

(5) 昭和41-2年調査、日本考古学協会生産技術特別委員会窯業部会の主催事業による。

2. 須恵器の編年 (別添付図参照)

古墳時代須恵器窯跡の調査研究は、筑前地方ではまだほとんど進んでいない分野の一つである。したがって窯跡出土資料による須恵器の編年の研究もいまだに行なわれたことがない。ここでは筑紫郡大野町大字上大利野添6号及び9号窯跡、同じく大浦1号及び2号窯跡の発掘調査の成果をふまえて編年を試みてみた。

編年において窯跡出土資料が古墳出土資料よりも、さらに純粋度の高いものであることはこと新しく述べるまでもない。もとより1窯跡の出土資料でもって、形式を設定することの不十分なことは否定できないが、ここでは現段階での窯跡出土資料をもって須恵器編年の大綱を知ろうとするものである。したがって資料の不適確・不備については将来窯跡の調査の進展にともなって、徐々に補足修正が加えられなければならない。

現在までに明らかにされているこの地域の分布調査の結果では、第Ⅱ期以前に遡る須恵器を生産した窯跡は知られていない。将来発見されることがあってもそれらは非常に限られたものであろう。

別表は、野添6号、9号、大浦1号、2号各窯跡出土須恵器の器種別一覧をしている。これらの中で形態変遷を最もたどり易いとされる蓋坏に注目するならば、各窯跡わずかずつ形態を重複させながら7段階の変遷を遂げている。今、そのおのおのを「型式」とみるならば、出土須恵器の量的

	蓋 坏	有蓋 高坏	高 坏	甕	埴 壇	壺	長頸 壺	鉢	平 瓶	提 瓶	横 瓮	甕	器 台
野添六号窯	a												
	b		大小	大小	a b		a b	a b		○	○	大小	○
	c												
九号窯	b												
	c		○		○		大小			○		○	
大浦一号窯	c												
	d	A		中小			○		○		○	大小	
	e												
二号窯	e	B 大小	○	○	○	○		大小					

筑紫郡大野町野添・大浦窯跡出土須恵器一覧表

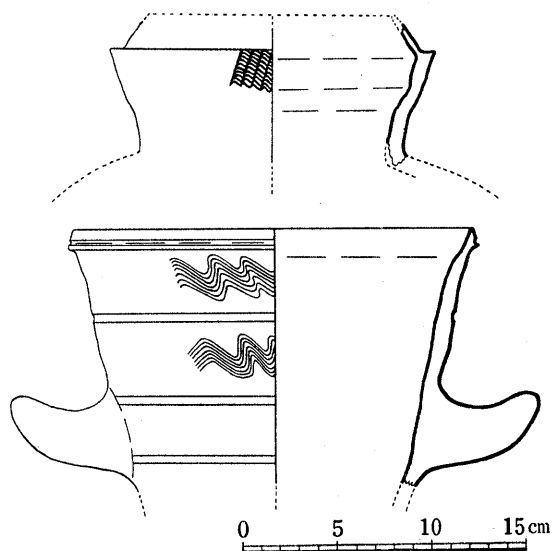
な観察からは、野添6号窯跡ではb式、9号窯跡ではc式、大浦1号窯跡ではd式およびe式、2号窯跡では1号窯跡で出現をみたところの前代の蓋坏とは系統を異にするB式が、それぞれ生産の主体を占めている事実が知られる。蓋坏の特徴はb・c式が第Ⅲ型式、d・e式が第Ⅳ型式、そしてB式が第Ⅴ型式に属することを示している。したがって、これらから機械的には野添6号窯跡が第Ⅲ期前半、同じく9号窯跡が第Ⅲ期後半に属し、同様に大浦1号窯跡が第Ⅳ期、2号窯跡が第Ⅴ期に属するという分離が可能である。次に時期別に編年の概要をみてゆこう。

第Ⅲ期前半に大部分相当するとみられる野添6号窯跡は灰原の量と7次にわたる床上げの状

態からして、かなり頻繁な操業が予想されるが、器種によって古式の特徴が長く残存しているものと、新しい傾向へと変化をみせているものがあることが注目される。前者では蓋坏腿などが指摘され、後者では高坏・小形の甕において顕著である。小形の甕の口縁部が凸帯を持たずに丸く形成されることは一見時期差を示しているかのように思われるが、この地域の特色であろう。高坏の長脚二段透しはすでに第Ⅱ期後半に比定される日拝塚古墳⁴⁾からも出土しているが、6号窯跡出土資料では脚端がさまざまに変化した形態をみることができる。この現象は同じ時期の須恵器を生産したとみられる八女市忠見区中尾谷窯跡群⁵⁾でも観察されており、この時期の一般的な傾向とみられる。蓋坏ではほとんどの場合器の内面に同心円のタタキを有しており、丁寧に消そうとしたものもあれば、明瞭に残っているものもあって6号窯の特色である。外面へうがりは比較的に入念に行なわれているが、その際に生じる砂粒の回転走行は左右ともあるが、左回転の割合がはるかに高いようである。その他器種の上からみると、この時期に横瓮が生産された形跡がある。口縁部を含む破片であるため全体の器形を知り得ないのは残念であるが、おそらく間違いないであろう。横瓮は筑前地方においては、古墳に副葬された例がほとんど知られずその出現の時期はまったく不明であった。提瓶は古墳出土資料ではすでに第Ⅱ期後半の時期に出現しているが、この時期には側面の扁平性がかなりあらわれている。

以上の6号窯跡出土資料の他にこの地域で採集された資料の中に、有蓋壺と甕があるが、いずれも第Ⅲ期前半の時期に含まれるものであろう。

第Ⅲ期後半の須恵器は野添9号窯跡出土資料が相当する。この窯跡はすでに以前から土採取によって焚口付近で切られ断崖となっているため灰原はまったく消失してしまっている。したがって窯内出土遺物のみであるため、資料が器形の上からも量的にも少ないのはやむを得ない。しかし形態的には第Ⅲ期前半を示す6号窯跡出土資料からの流れは指摘できる。



第 27 図 野添窯跡付近表採の須恵器

蓋坏では前半の時期に比べて全体的に蓋受けが低くなり内傾度が増す。蓋・身ともやや浅くなり肩部の張りを失ってゆく。蓋の肩部に沈線を施す割合はほぼ半々である。ここでも内部にタタキ痕を有するものがみられる。高坏では非常に資料に限られるが、同時期に比定される福岡県鞍手郡神崎2号墳⁶⁾にみられるような小形高坏は1点も出土していない。小形高坏は、同

時期の筑後地方の場合、塚ノ谷第4号窯跡⁴⁾において特徴的な出土をみており、第Ⅲ期前半に比定される乗場古墳の遺物⁵⁾にも存在が知られることから、筑後では筑前地方にやや先んじて小形化が行なわれたようである。野添、大浦窯跡群では、小形高坏の出現は第Ⅳ期までまたねばならない。また、古墳資料ではさきにあげた神埼2号墳で平瓶が出現することが注意されるが、窯跡資料では発見されていない。しかし野添9号窯跡付近から採集された扁平の細頸壺とも呼ばれる形態のものが、平瓶に代わって行なわれていた可能性はあろう。

総じて野添9号窯跡出土資料にみる第Ⅲ期後半の特徴は、やや保守的傾向を示しており、特に筑後地方と比較すると器形の分化、小形化という点で後進的であると言えよう。

第Ⅳ期は大浦1号窯跡出土資料が相当する。蓋坏にみる大形と小形の違いは、時期差としてとらえて前後二分することが可能であるが、他の器形については確証が得られない。この時期の特徴は、器形の小型化とともに、ヘラ削り技法にみるような製作上の技術的な粗雑さが目立ってくる。小形高坏と新しい系統の坏が出現することは、第Ⅳ期の象徴とみることもできよう。

蓋坏は小型化にともなって生じたヘラ切り離し部分の面積の縮小から、直線的に切ってその後まわりのヘラ削りを行なわない傾向に向う。大浦窯ではこの段階になってはじめて蓋と身が混同されるような形態をとっており、それ以前には一般に指摘されるような蓋と身との逆転という現象は起らなかったのではないかと推測される。他の器形についても平瓶の出現を除くと大幅な変化は認められず漸進的である。

小型化した蓋坏がつくられ出して間もないころ1号窯跡は廃棄され隣接して2号窯が築造されて作業が開始される。そこではまもなく古い型式の蓋坏はすたれて、第Ⅳ期に出現した身にかえりをもたない新しい系統の坏が製作される。

第Ⅴ期は、古い型式の蓋坏の消滅をもってはじまる。これに代わって平底あるいは丸底に近い形態の直口する口縁を有する坏が行なわれる。これは乳頭状のつまみを有し、身受けをもつ蓋がともなう。大きさから大小2種に分類することができる。この系統の坏は第Ⅳ期に出現したものであるが、第Ⅳ期との形態上の著しい違いは器壁の厚さにある。すなわち、第Ⅴ期の坏がより厚く作られていることが指摘できるが、この相違が成形技術に起因するものかあるいは焼成時の必要によるものか、にわかには断定することはできない。しかしこの傾向がこの時期にかなり普遍的にみられるところから、一工人のくせなどといった単純な理由ではないことは明らかであろう。八女市塚ノ谷窯跡群では、第Ⅲ期後半の窯に比べてこの時期の窯が、長さの縮小とともに床面傾斜を著しく増大させていることは暗示的である。

高坏では長脚は姿を消し矮小化されたものへと変化する。

大浦窯跡ではこの他に、須恵器と共に瓦が生産された事実は重大な問題を提起するが、瓦の側からその製作時期が明らかとなれば、須恵器の編年にとっても大きなよりどころとなるに違いない。

以上のように、野添・大浦各窯跡の須恵器の変遷をみてくると、第Ⅳ期の段階までは全国的な傾向と大きく異なるものではないが、非常に保守的でその変化が漸進的であると言うことができよう。このことは、周辺の地区に顕著な群集墳の形成をみなかったこととも無関係ではないと思われるが、そのような需給関係とともに 工人集団のあり方が 問題となるのかも 知れない。瓦の製作が新しい技術者の導入でもって開始されたであろうことは当然予想される。第Ⅴ期にみる画期はそうした中から生じてきたのであろう。(真 野 和 夫)

註 (1) 「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第五輯」(福岡県教育委員会 昭和5年)

(2) 「八女古窯跡群調査報告2」(八女市教育委員会 昭和45年)

(3) 「福岡県文化財調査報告書 第28集」(福岡県教育委員会 昭和38年)

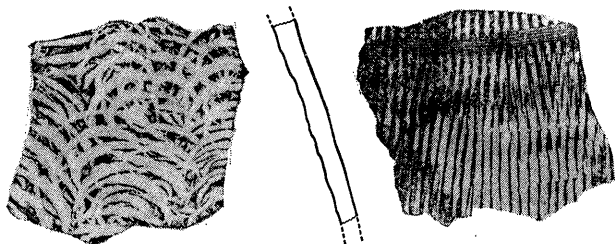
(4) 「八女古窯跡群調査報告1」(八女市教育委員会 昭和44年)

(5) 註(4)に同じ

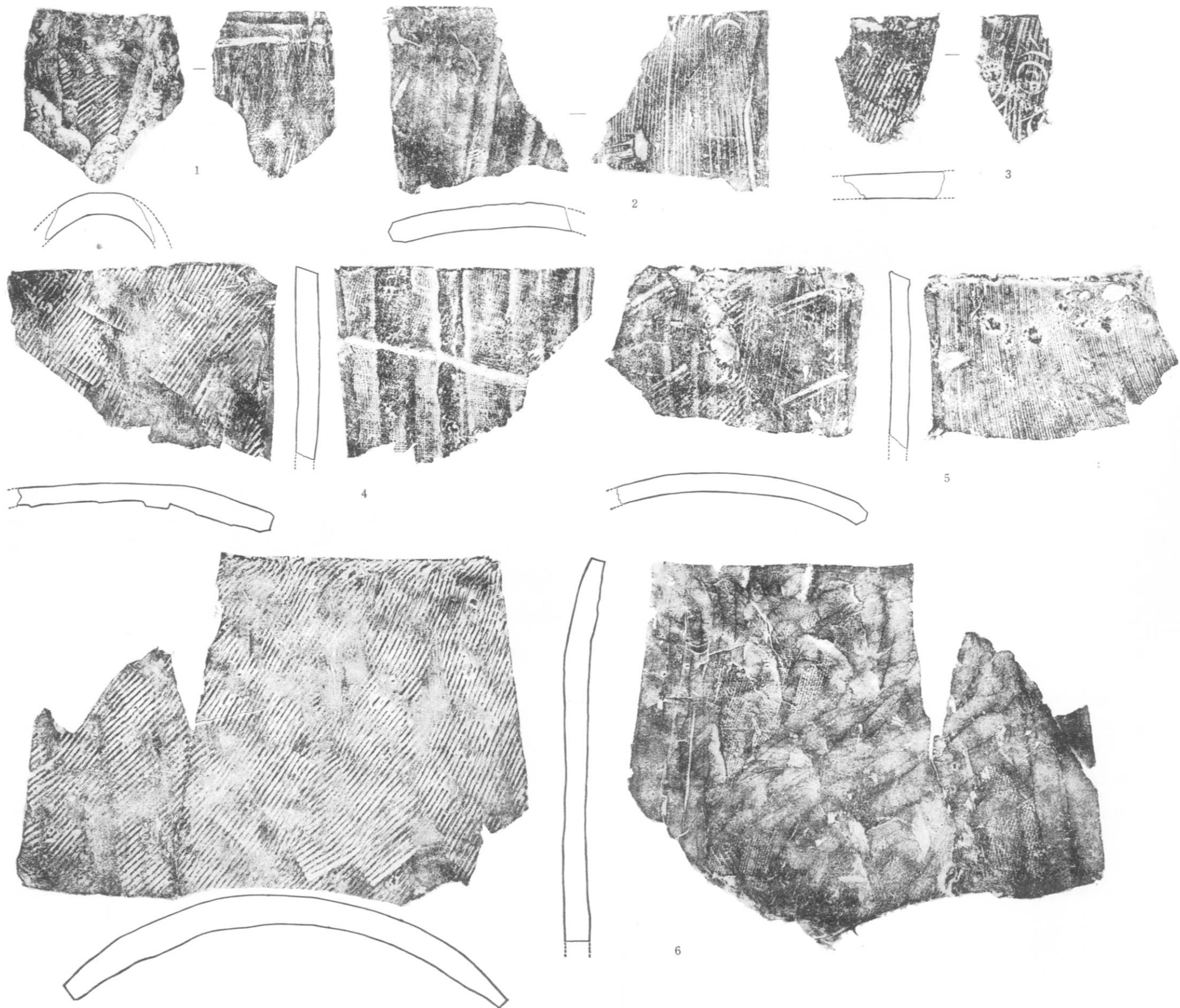
3. 大浦第2号窯生産瓦の問題

大浦第2号窯跡の調査で注目されるのは須恵器第ⅣB期から第Ⅴ期に及ぶ時期に、これらの須恵器と共に瓦が生産されていることである。遺物の出土状態の観察からは両者の生産が先後関係にあるのではなく、同時生産とみなさざるをえない。そうすると6世紀末から7世紀初め頃にかけてこの窯で瓦陶兼業の生産が行なわれていたこととなってその意味するところはきわめて重要である。

まず本窯跡発見古瓦の観察からはじめよう。平瓦と丸瓦の二種があるが、丸瓦は非常に少ない。表面に布目、背面に平行条線叩文が印されている。完全な遺品がないので正確な大きさを知ることができないが、丸瓦の上端には玉縁がなく(第29図1)、また平瓦では上端幅が復原すれば27cmほどで下端にむかって次第に幅を広げてゆく傾向を示す例(第29図6)も知られたので、行基葺形態の瓦であることがうかがわれる。瓦の背面にあらわれた平行条線叩文⁽¹⁾は、凹部幅が凸部より幅広く刻まれていて、叩き板は瓦の上下方向に対して斜め方向に打たれ、瓦の下端から上端にむかって回転しながら叩きあげている。また表面には桶巻造りによる桶板の連接する形がよくのこっているものがあって造瓦技法をうかがうことができる(第29図4)。瓦の製作仕上げにあたっては、以上の手法をそのままのこしているものもあるが、背面を篋で上下方向になでて叩文を消した



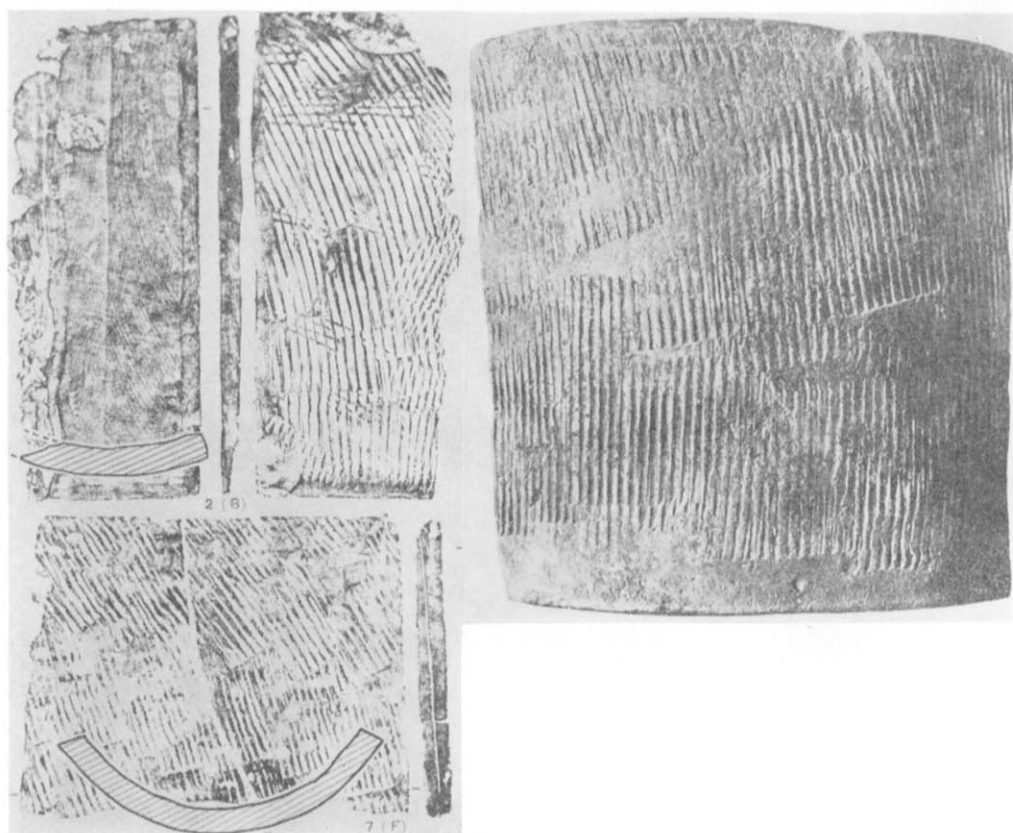
第28図 大浦第2号窯跡発見の須恵器瓦拓影 (1/3)



第 29 图 大浦第 2 号窯跡瓦拓影 (1/3)

もの（第29図2・5）、表面を騒き板あるいはササラ様のもので上下に騒いたもの（第29図2・5）や、篋で不規則に削ったもの（第29図6）がある。また瓦の両側面は桶造りの結果できる割りといった痕跡を面取りして消している。さらに表面の上下端寄りに同心円叩文の痕跡をのこすものがあるのは注意をひく（第29図2・3）。この瓦に用いられた平行条線・同心円などの叩文様は、須恵器の表裏に屢々印されていて本窯跡出土の須恵器甕にも同種の叩文が使用されている（第28図）。

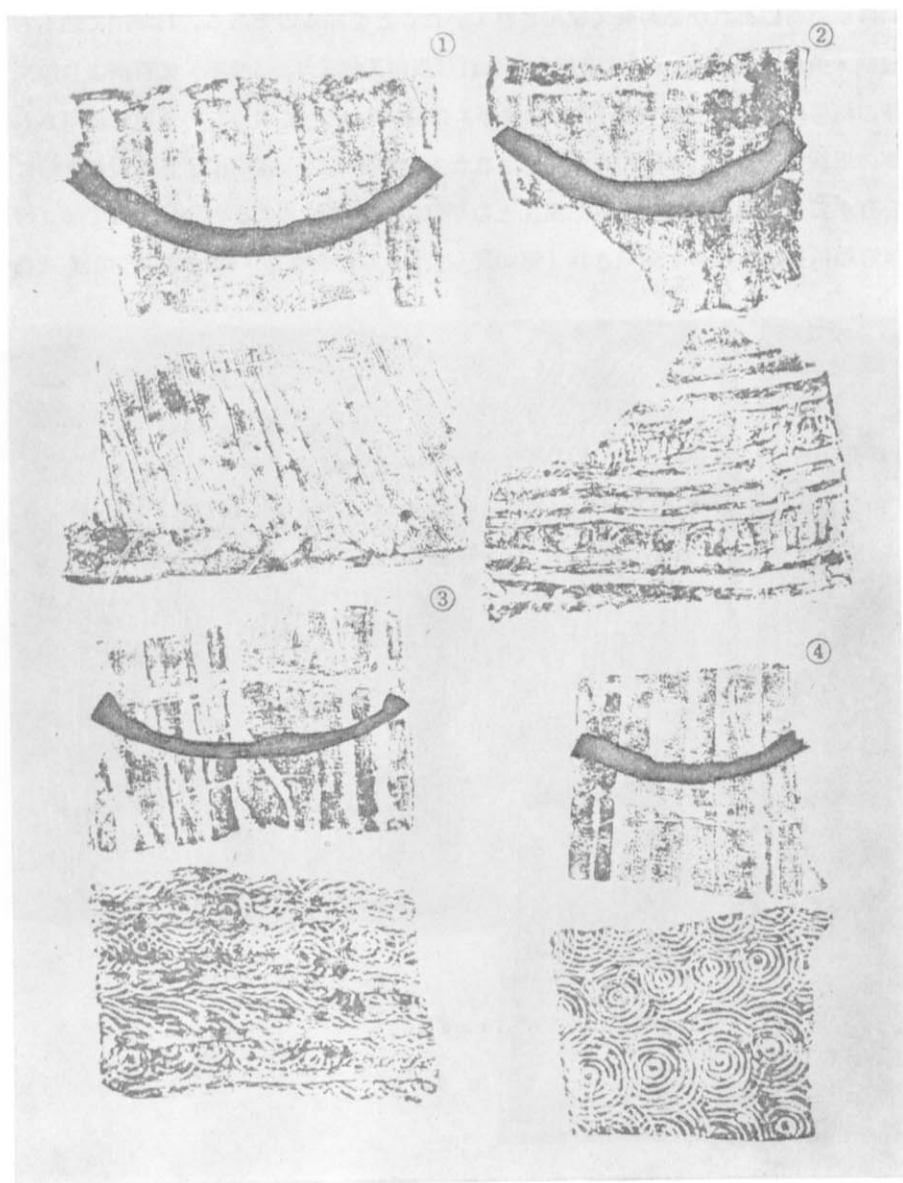
以上のような観察から本窯発見の瓦が須恵器製作工人達によって造瓦技法が摂取され、その製造具に須恵器のそれがあわせて使用されていたことを知るのである。わが国で最も古い寺院は奈良県・飛鳥寺である。「日本書紀」によれば崇峻天皇元年（587年）に百済より渡来した技術者達の指導によって推古天皇四年（596年）に完成した。この寺院の創建に使用された瓦は行基葺の形態であり平行条線叩文が使用されたものがある⁹⁾。さらに平瓦表面の上端に同心円叩文を有するものがある点でも大浦窯瓦との類似が指摘される。この後、畿内ではこの種の瓦が大阪府船橋遺跡¹⁰⁾からも発見され（第30図左）、さらに京都市・幡枝窯跡¹¹⁾では飛鳥寺の創



第30図 船橋，韓国の平瓦

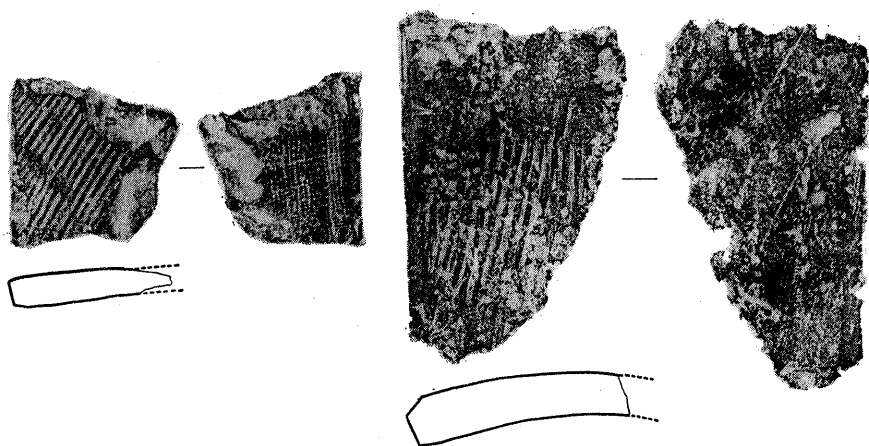
建時瓦当文と同類の軒丸瓦、須恵器を生産した事実が確かめられた。ここでは斜格子目叩文平瓦が多く、その表面に同心円叩文を印するものがある点は注意される。調査者はこの窯跡を7世紀初頭に比定している。

九州地方では、昭和32年に、賀川光夫氏と筆者等が調査した大分県中津市・伊藤田窯跡⁽⁴⁾がある。これは全長14.8mの登り窯で、多量の平瓦と須恵器の甕・壺などが発見された。瓦は桶巻造りで、背面に同心円叩文を全面に打出している。なかにはこの叩文を左右に篋を擦過して消したもの（第31図2・3）や上下方向になでいて完全に消したもの（第31図1）がある。



第 31 図 大分県中津市伊藤田窯跡の平瓦拓影

る。須恵器は第Ⅴ期から第Ⅵ期に及ぶと思われる。その後、福岡県筑紫郡那珂川町片縄で平行条線叩文ある平瓦片が2・3採集されたが、遺跡の性格は不明のままである⁶⁾ (第32図)。

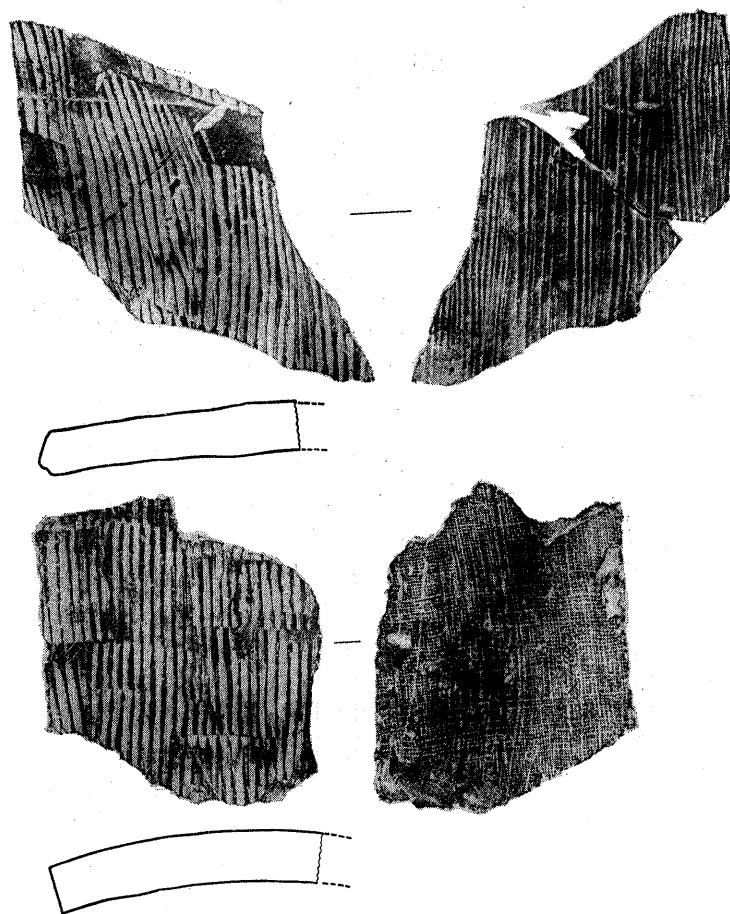


第 32 図 福岡県・片縄遺跡採集の平行条線文平瓦 (1/3)

一方、平行条線叩文を有するものは、肥前・基肄城跡や豊前・垂水廃寺で発見されている(第33図)。特に基肄城は天智天皇四年(665年)に百済系技術者の指導によって築城された朝鮮式山城で、百済系単弁軒丸瓦をも使用していること⁷⁾、さらに半島でも古新羅時代の古墳から平行条線叩文平瓦の発見が知られていること⁸⁾(第30図右)などから、かつては九州におけるこの種瓦の上限と系譜を基肄城の出現という歴史的事情のなかに求めようと考えてきたが⁹⁾、大浦第2号窯の発見によって少なくとも半世紀さかのぼらせて再考すべき段階に達したのである。

九州における寺院の出現は7世紀後半～末頃と考えられ、今のところこれよりさかのぼる遺跡は知られていない。なかでも垂水廃寺を含む豊前地方には新羅・百済などの半島系瓦を主体とする寺院がこの頃に出現している¹⁰⁾。基肄城や垂水廃寺で発見された平行条線叩文平瓦は桶巻造りでなく一枚造りと思われるので、大浦窯や伊藤田窯のものよりも製作技法の上ですんだものといえよう。いずれにしても大浦窯や伊藤田窯のこの種瓦は共伴する須恵器の編年観からみて、九州の寺院出現以前に比定されるもので、6世紀末から7世紀前半代という年代が与えられるのであろう。両窯の製作瓦が供給された遺跡はまだ発見されていないので、今後にのこされる問題があるが、畿内の飛鳥寺や幡枝窯と同時期、少なくともこれよりは下らない時期に北九州でも瓦陶兼業の形態をとって瓦の生産が始まっていたという問題を提起したのである。九州における瓦の始源が寺院の造営とは必ずしも関係なく、むしろそれに先行して生産されたところに畿内との相違点が見出されることもあわせて注意しておくべきであろう。

(小田富士雄)



第 33 図 基肄城（上），垂水庵寺（下）の平瓦拓影（1/3）

- 註 (1) 一般に叩き板の征目に直交するように平行線を刻むといわれているが、九州のこの種瓦にはこれまでのところ征目の痕跡を確かめることができない。板目材料の使用も予想している。
- (2) 「飛鳥寺発掘調査報告」（奈良国立文化財研究所学報 第五冊）（昭和33年）
- (3) 原口正三「船橋遺跡の遺物の研究」（昭和33年）
- (4) 横山浩一・吉本亮俊「京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡」（日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨）
- (5) 賀川光夫「伊藤田瓦窯跡」（「中津市史」第五章 第五節 昭和40年）
- (6) 伊藤奎二君の採集資料による
- (7) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考」（史淵 第95輯 昭和41年）
- (8) 「朝鮮古蹟図譜」三 図版362参照 大正5年
- (9) 小田富士雄「平瓦の叩目文」（「日向国分寺跡」第五章 第三節三 昭和38年）
- (10) 小田富士雄「九州初期寺院址研究の成果」（古代文化第17巻3号 昭和41年）

福岡県文化財調査報告書 第43集

昭和45年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷 正光印刷株式会社

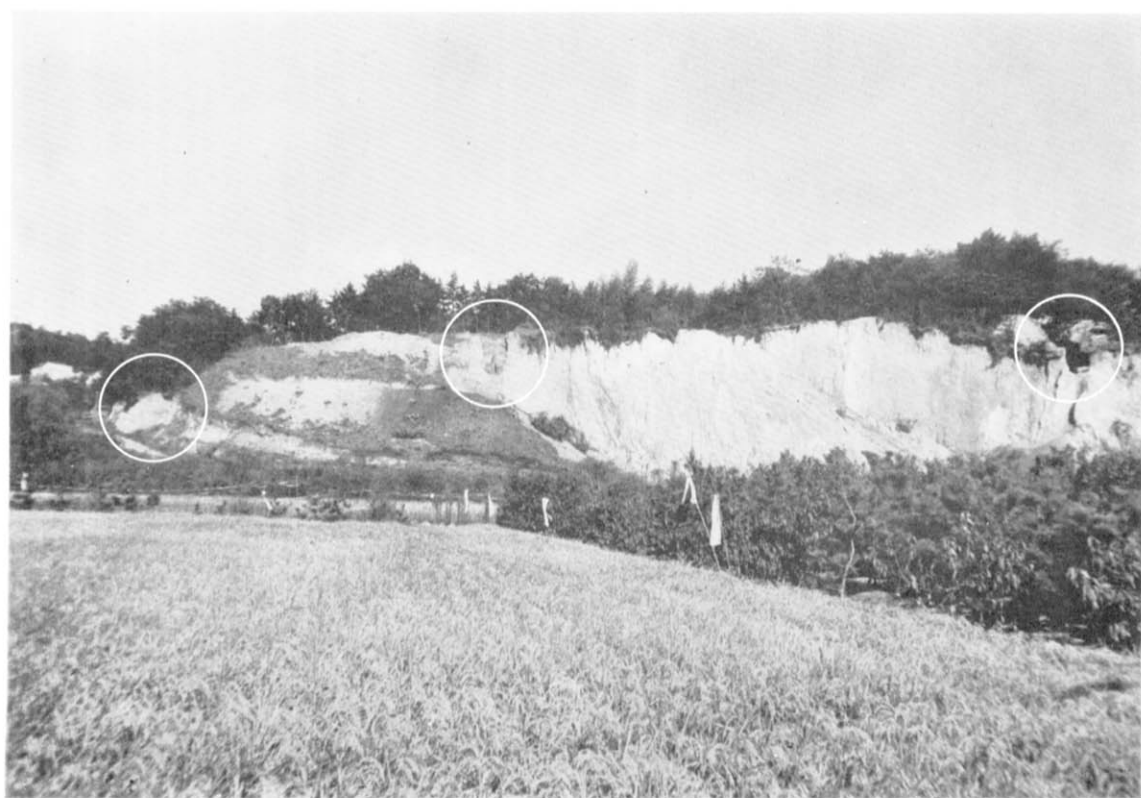
福岡市赤坂1丁目2～21

TEL 代 ㊟ 3 2 6 6

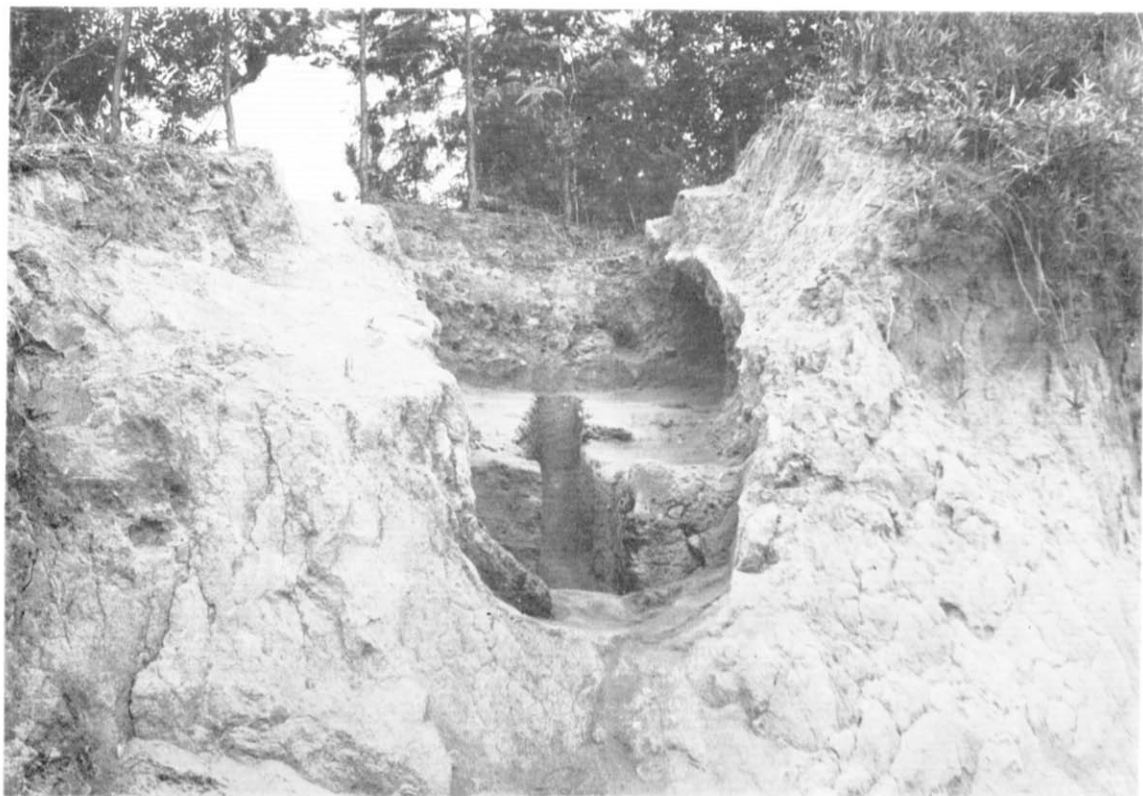
圖 版



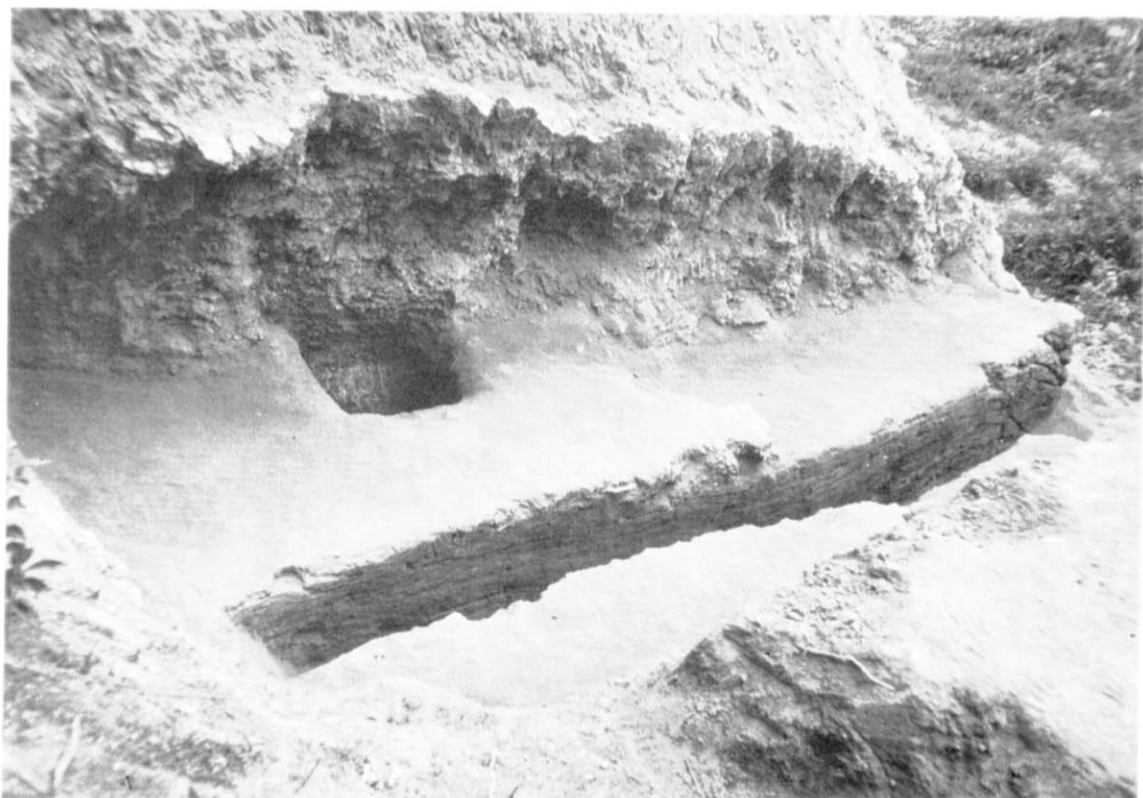
1 窯跡の立地遠景 (矢印左・第6号窯跡, 右・第9号窯跡)



2 窯跡の立地近景 (左より 第4・5号窯跡, 第6号窯跡, 第9号窯跡)



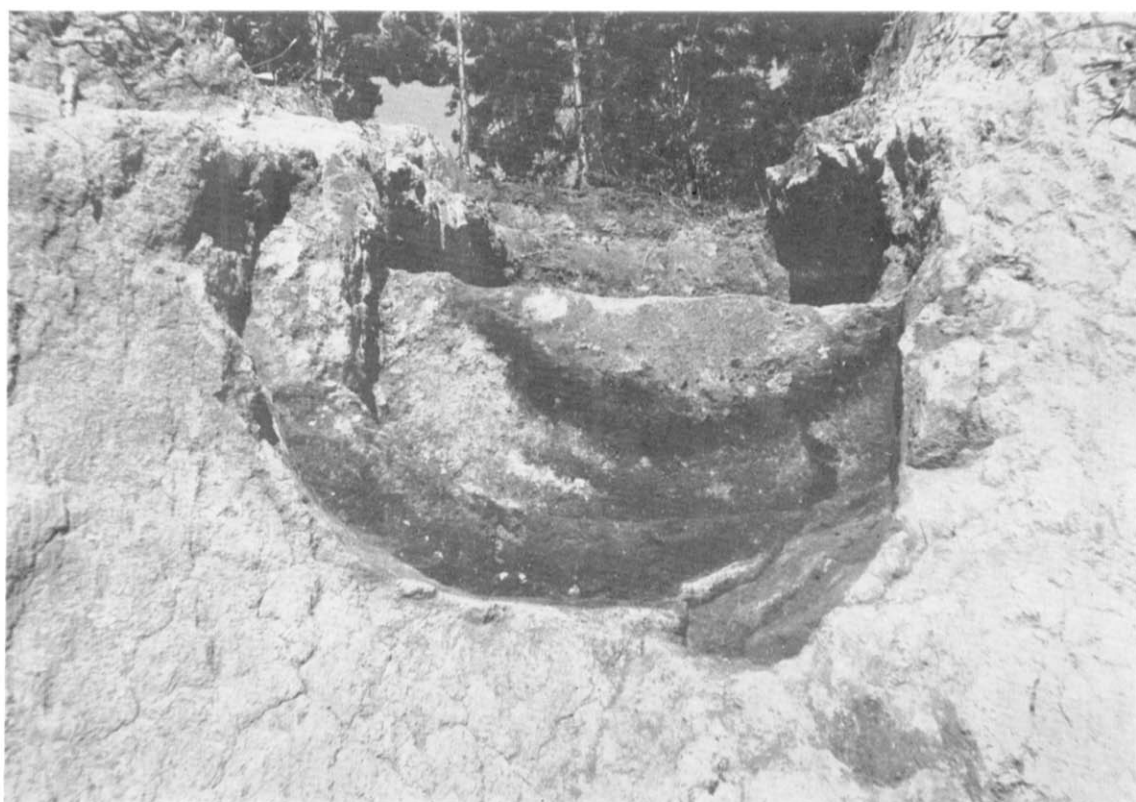
1 野添第6号窯発掘後の全景



2 野添第6号窯発掘後における窯跡内部の状態



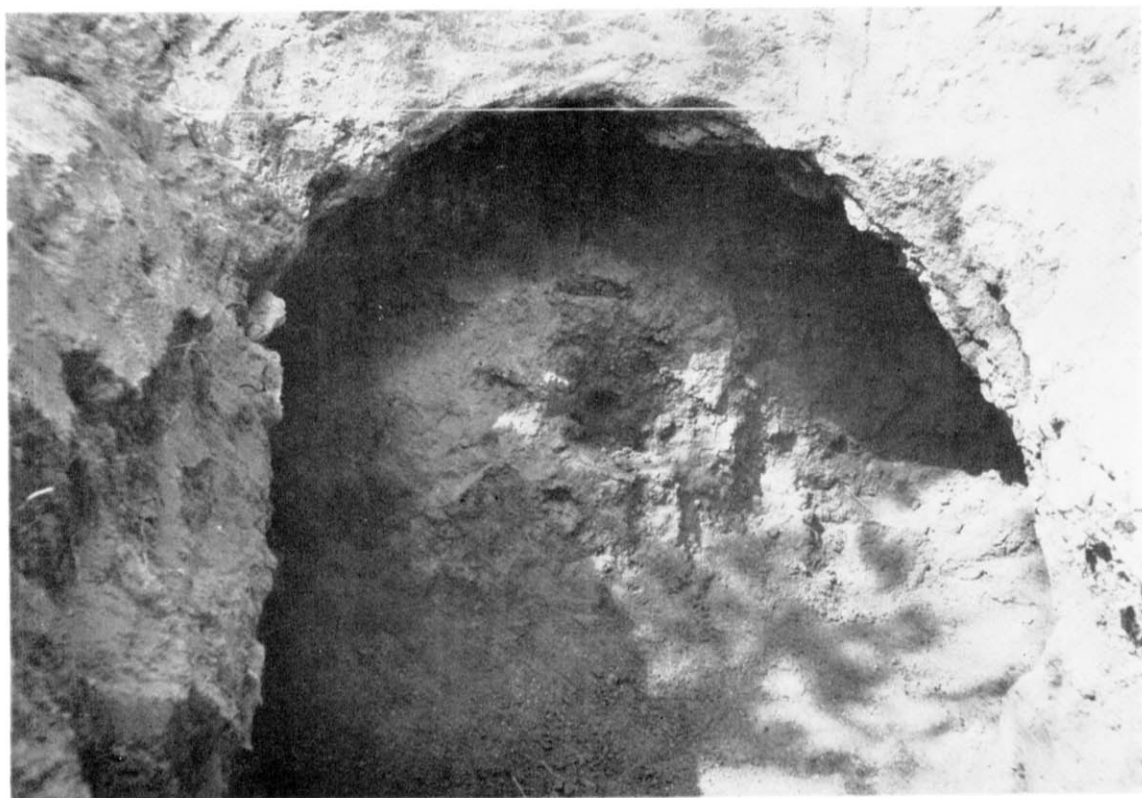
1 野添第6号窯跡灰原縦断面 (第9号窯跡より望む)



2 崖面にあらわれた野添第6号窯焚口附近断面



野添第9号窯跡発掘後の全景(煙出し側より)



上・発掘中における天井残存状態
下・発掘後における窯壁の保存状態



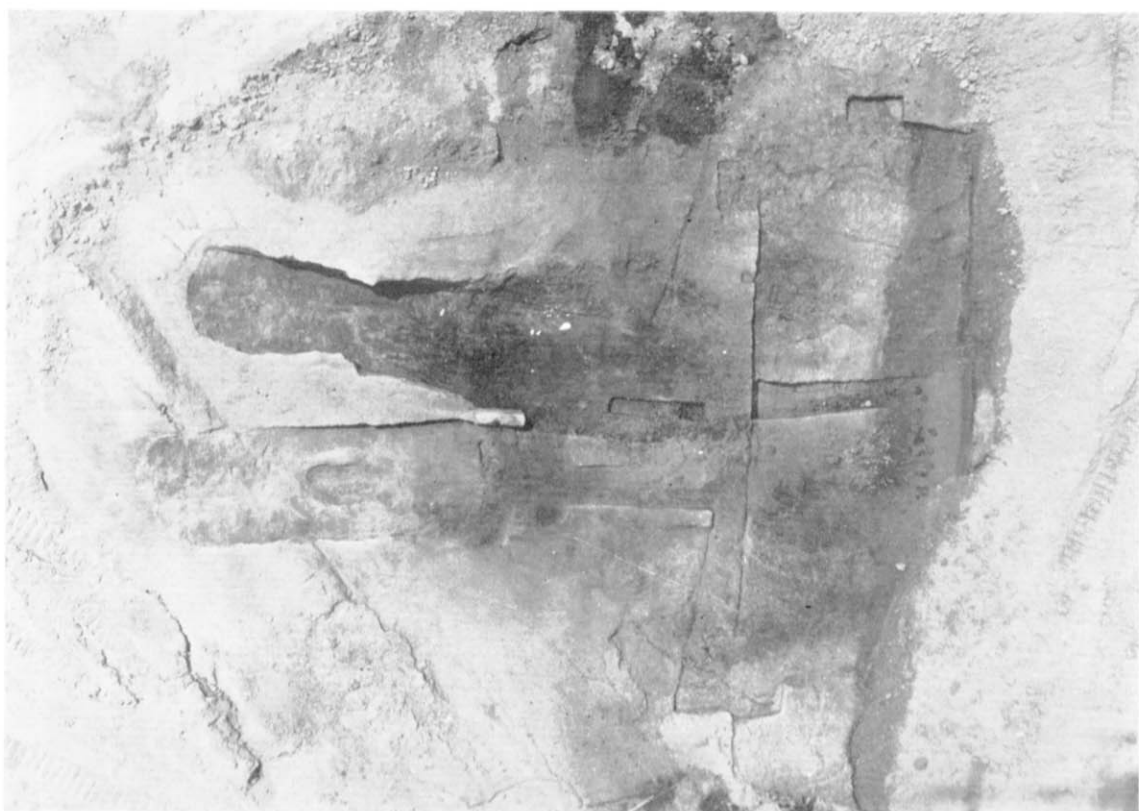
1 第4号窯跡(左), 第5号窯跡(右) 断面露出状態



2 野添第5号窯跡断面



1 大浦窯跡立地遠景（北西から）



2 大浦窯跡垂直写真



1 大浦第1号窯跡第1次床面の状態（前庭部から）



2 大浦第2号窯跡第3次床面の状態（煙道方向から）



1 大浦第2号窯跡第1次床面全景（前庭部から）



2 大浦第2号窯跡第1次床面遺物出土状態（南から）

